
【転生】マリコルヌとして生きる俺の新たな命（仮）

歌舞伎屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【転生】マリコルヌとして生きる俺の新たな命（仮）

【コード】

N7007T

【作者名】

歌舞伎屋

【あらすじ】

それなりにオタクだった俺はある日突然死んでしまった。何故死んだのかはさっぱり分からん。だが、何故か俺の意識だけは存在していた。そして、そんな俺に話しかけてきた謎の老人の声。そいつの言うことによ、何と俺は転生出来るらしい！そんなこんなで転生した先はゼロの使い魔の世界。そして俺は……え？マリコルヌ？…仕方無い、マリコルヌはマリコルヌなりに精一杯楽しんで生きてやるぜ！……そんな感じの小説です。アンチルイズ傾向有り。

プロログス

どうやら俺は死んでしまったらしい。

何で死んだのか……そのところだけ記憶が抜け落ちていてよく覚えていない。

だが、とにかく俺は死んだ。

それは確かなようだ。

それならば、過ぎたことを悔やむような真似はしない。

……今は。

生前の俺は結構ディープなオタクだった。

でもオタクであることが嫌で、いつかはそこから抜け出そう抜け出そうとして、それが出来ずにまたどっぷりとアニメやら何やらに浸かる。

そんな日々を送っていた。

でも、そんな日々も決して悪くは無かった。

馬鹿な話が出る親友も何人かいたし、彼女こそは出来なかったが、女友達もいた。

毎日を過ごすのに退屈はあまり無かった。

こういうのを人はリア充、と呼ぶのだろうか？

……まあ、生前の俺はそう思ったことはなかったけど、死んでみて改めて人生を振り返ると、そうだったんじゃないかな、と今では思う。

くどいようだが、俺は死んだ。

じゃあ、今ここで一人語りしてる俺は何なんだ？とお思いの方もおられるだろう。

かく言う、俺もよくは分かん。

分かる範囲だけで説明するならば、意識だけがそこに存在している
って感じかな。

何も見えないし、何も聞こえないし、何も臭わないし、動くことも
出来ない。

でも、確かに俺はここにいます。

不思議な感じだ。

人が死んだらどうなるんだろう？と考えたことは誰しもあると思う。
俺も勿論あるし、酷い時は怖くて泣きそうにさえなった。

人が死んだら幽霊になって彷徨うのか、はたまた何も無い無へと追
いやられるのか……。

それが分からない。

だから怖い。

死後のことを教えてくれる者はいないのだから。

……俺としては幽霊として彷徨いたかったなあ、視覚とかそのまま
で。

そしたら覗きとかし放題だったろうし……おっと、これは失言だっ
たな。

でも健全な男子ならば分かるだろ？

……まあ、実際に死んだらこの通りなわけだ。

何もない無よりはマシだと思うけど、なまじ意識があるから欲求も
生まれる。

見たい、聞きたい、触りたい。

……どれも性的欲求によるものでは無いから、勘違いなさらぬよう
に。

まあ、全く無いとは言わないが。

でも、どれも今の俺には叶わないことだ。
こんなことが当たり前だった生前をついつい懐かしんでしまう。

そんな風に長い時間を過ごしてきた俺だったが……いや、もしかしたらそんな風に長くは無かったかも知れないな。
何せ時間の感覚って奴が全く無いのだから。
ともあれ、ある時声が聞こえてきたんだ。

え？さっき言ったことと違うって？

いや、確かに音の類は聞こえないのよ。

真空というか、行ったことは無いけど、宇宙空間ってきつとこんな
んだろうなあ……って思った。

だから、その声ってのはきつと耳で聞いたものじゃないじゃないん
だろつ。

意識に直接語りかけるといっつか、テレパシーみたいなものなのか。
とにかく、聞こえたんだよ。

老人の声が。

『聞こえておるか……？』

ほら、こんな風にね。

『……ふむ、もう一度聞くんが、俺の声が聞こえるかのうっ？』

聞こえてるよ。

『ほっか……』

あんた誰だよ？

『僕はそなたたち下界の者が神と呼ぶ者じゃ。また違う者にとっては悪魔……なのかのう？』

神？悪魔？

『どちらでも良い……。他者からの呼称など何の意味も持たぬ。己が己を知ってさえおればのう……』

……で、その他称・神or悪魔がこんな死人に何の用だよ？

『ほっほっほっ、なあに簡単な話じゃ。そなたに再び生の機会を与えようと思つてな』

生の機会……つて、まさか生き返ることが出来るのか？

『いや、下界でそなたが前まで使つておつた肉体は既に滅んでおる。仮に肉体があつたとしても、一度離れた魂を元に戻すことは出来ん』

そうか……。

『故に、そなたへ与える生は転生じゃ』

転生？

『ほっじゃ。そなたは別の何かへ生まれ変わるのじゃ』

別の何かってことは、人間とは限らないってことか？

『そうなるかのお』

そうか……。

『ガツカリすることは無い。仮に虫になったとしてもその一生の尊さは人間と大差ない』

……でも、虫は流石に嫌だな。

自然界で頑張つて生きている虫たちには悪いが、嫌なものは嫌だ。第一、俺は虫が嫌いだ。

『ほっほっほっ……まあ転生したら今までの意識は消え去る。案ずるだけ無意味というものじゃ』

意識が消え去る……だと？

それは問題じゃねーか！

俺が俺で無くなつたら生き返る意味無いだろ！

『そういうものなのかのう？まあ、中には前世の記憶……つまり、自分という意思を持ったまま転生したいと希望し、そうした者もある』

おお、マジか！？

それならそうと先に言ってくれよ。

『しかし、前世の記憶を抱えたまま来世を生きるのはそなたの想像以上に辛い辛いみたいじゃのう。現にそうしてやった者の多くは前世の半分も生きぬまま自殺してしもつた』

……。

『それを聞いても尚望むのであれば、そのようにしてやっても良いが……』

うーん、ちょっと考えさせてくれ。

……やっぱり、俺は俺でありたいな。

振り返れば糞つたれみたいな人生かも知れないが、それでもそれは俺が生きてきた証。

俺が俺である証なんだ。

前世を俺のまま全う出来なかったならば、来世も俺でありたい。

俺のまま全うしたいね。

『ほうか……それならばそうなるようにしてやるう。ただし、来世も人間とは限らんぞ?』

……そう念を押されると躊躇するけど、俺で無くなるくらいならこのままの方がいいや。

その気持ちは変わらないな。

『そなたが元々いた世界で転生するかさえ分からぬのだが、それでも良いのか?』

……ん?

それはどういう意味だ?

『世界というのは無数に存在してある。そなたがいた世界はその一つに過ぎぬ。そなたの世界の中にもまた無数の世界があり、それらが平行して世界は成り立っておるのだ』

要するにパラレルワールドって奴か?

『定義の名前に意味など無いが、そなたたちが分かり易いというのであれば、その言葉が適切なのじゃろうな』

『ってことは何か？もしかしたら別の世界の俺に会えたりするわけか？』

『可能性は無いはないのう。そこにおれば……の話じゃが』

……神様のくせに曖昧な返事だなあ。

いや、他称・神様 or 悪魔だっけか？

『儂とて万能では無いということじゃ。……それに儂にはそなたたちみたいに世界を創り出すことは出来ないしのう』

世界を……創り出す？

それって正に神の所業じゃないの？

人にそんな力は流石に無いと思うぞ。

『そなたたちは物語という名の世界を創り出す。創り出された世界はやがて自我を持ち、一つの世界として無数の世界の中へ溶け込む……。儂には出来ぬことよ。こうしておる間にも世界はまた一つ創られておる』

ふーん。

……ってことはあれか？

俺の転生先には誰かの作った物語の中の世界も含まれちゃったりするの？

『無数の世界の何処かへ……じゃから、そついうことも有り得るじやろうなあ』

つまり、運良く二次元の世界へ行けたら生で俺の嫁に会えたりするわけだ。

……それはそれで胸が熱くなる話だな。
胸は無いし、熱も感じないけどさ。

『……さて、そろそろあなたを転生させるとしよつかのう』

おお、もう転生するのか。

……いざ、そうなるとやっぱり緊張するな。
意識だけの存在でも緊張してするんだな。

『ほっほっほっ。そんな大それたことではない。普通にしておればいい。あらかじめ言っておくが、前世の記憶を持ったまま転生するとは言っても、生まれ出でてすぐにはそれが表れることは無い。自我が芽生えるまでには少し時間が掛かる。それは人間じゃろうが、動物じゃろうが、植物じゃろうが一緒じゃ』

オーケイ、分かった。

まあ、仮に転生先が人間だった場合、生まれてすぐの赤ん坊に俺の意思があったら、それはそれで俺も来世の俺の両親も困るだろうしなあ。

いい配慮だと思つよ。

『ほつか。では行くぞ……』

あ……。

転生する前にちょっとだけ聞きたいことがあるんだけどいいか？

『……何じゃ？』

俺は何で死んだんだ？

『聞きたいのか？』

やっぱり自分の死だからな。

そこだけ記憶無いのも気持ち悪いし。

『そなたは暴漢に襲われ、刺し殺されたのじゃ』

そうか……。

意外と普通じゃない死に方だったんだな。

その場面の記憶はやっぱり無いけど、何となくスッキリしたよ。

『……そうじゃ。もう一つだけ言っておくが、自殺した者は転生の資格を失う。もう一度ここへ来たいのならば自ら命を断つような真似はしないことじゃ』

え？

また来れるの、ここ？

っていうか、そんなこと教えていいのか？

何となくルール違反な気がするんだが。

『ほっほっほっ、そなたには説明しておくべきと儂が判断したまでじゃ。こうしておる間も何千何万もの魂が転生を繰り返しておるのじゃ。中には何も知らずに転生する者もあるし、全てを知ってから転生する者もある。そこにルールとかそういったものは無いのじゃよ』

その辺、結構アバウトなんだな。

ちなみに死後の世界……いわゆる今の状態だけど、これって他の人に話しても大丈夫なのか？

『何も問題は無いのう』

ふーむ、じゃあ生前の俺が死後の世界についてのちゃんとした話を聞かなかったのもたまたま身近に前世の記憶を持って転生した人間がいなかったってわけか。

まあ、俺もこんなことは酒の席とかじゃない限りは薦んで他人に聞かせようとも思わないし、そういうものかも知れんな。

仮に聞かされてもいいとこ話半分だったろう。

『それでは、行くぞ』

いよいよ転生か。

はてさて、どうなることやら。

俺の意識は真っ白になり、そのまま眠りについたような状態になった。

次に目が覚めた時、俺は別の誰か……もしくは何かになっているのだろうな。

それじゃあ、おやすみ……。

『ほっほっほっ、行ったか。……先程は言わなかったが、そなたと逢ったのは今回が初めてでは無いんじゃないよ。そなたは忘れておるだろうがな。面白い奴じゃったよ。この儂が覚えておるくらいには、な。そなたが己が意思を持ったまま転生するのは初めてじゃが、果

たしてどうなるのかのう。願わくばまた逢いたいものじゃ。ほっほ
っほっほ

プロログス（後書き）

とまあ、こんな感じで始まります。
暫くはプロローグ……いや、プロログスですね。

転生！その名も……？

そんなこんなで俺は転生した。
してしまつたのだ。

生前の記憶と人格を持ったまま……。

いやー、結構あっさり行つちやつたなあ。

そして、気になる転生先はハルケギニア……何と、ゼロの使い魔の
世界だつた！

……まさか、マジで物語の中へ転生するとは思わなんだ。
半信半疑だったが、これはどちらかと言えば喜ばしいことなんだろ
う。

そして、今の俺は何とマリコルヌ！

そう、あのマリコルヌ・ド・グランドプレなのだ！

……軽い失望感が込み上げる。

ゼロ魔には様々な脇役がいるが、よりによってこいつかよ！

原作でもアニメでも二次作品でもネタキャラ以上の存在にはなり得
ない、生粋の変態キャラ。

いや、最初は変態では無かつた筈なんだがな……。

まあ、生まれ変わりたくないゼロ魔キャラというアンケートを取っ
たら、こいつはまず間違いなく上位に入るだろうね。

過ぎたことを悔やんでも仕方がない。

今の俺はマリコルヌ。

その事実は変わらないし、変わりようがない。

最悪、虫や獣を想定していただけに、人間として転生出来たことは

寧ろ感謝すべきだろうね。

それに悪いことばかりじゃないしな。

マリコル又は仮にも真つ当な貴族。

この世界においての上流階級だ。

だから、この世に生まれ出でて自我が目覚めてからこの方、苦勞らしい苦勞はあまりしていない。

それどころか、かなり甘やかされてここまで育ってきた。

……なるほど、こんなに甘やかされてきたら、そりゃあ原作初期の小生意気な性格にもなるうってものだな。

ちなみに俺にとってゼロの使い魔は原作をかなり昔に読んだことがある程度のもので、読み込んでもないし、記憶も朧気だ。

寧ろ、二次作品の方をよく読んでいたので、設定とかそっちとこっちゃになっっているくらいだ。

まあ、他称・神or悪魔の言うことにゃ、そもそもこの世界が原作のゼロ魔の世界と同一のものかも定かじゃないわけで、原作とは違う展開になるかも知れない。

原作知識だけを頼りにやっていると、そういった時に対処出来んかも知れんし、そこは参考程度に止めておくのが無難だな。

それに、あまり目立つようなことすると、何処の誰に目を付けられるか分からん。

ゼロ魔の世界は意外と物騒だしね。

ガリアとかロマリアとかね。

ってなわけですくすくと成長した俺はもうすぐトリステイン魔法学院へ入学！って感じだ。

俺の現在の容姿は原作とは異なり、かなり痩せていたりする。

生前の俺も痩せ型だったし、少食では無いもののそんなに食べる人間でも無かったからな。

ラーメン 郎とか一度行つて「何で小を頼まなかったんだ」と後悔

したくらいだし。
それに多少は節制もしていたので、原作のように丸々太ることなく大きくなれた。

意外だったのは、痩せているとマリコル又も案外イケメンだったということだ。

勿論、ギーシュとかと比べたら流石に負けるかも知れんが、生前の俺のいた世界でもそこそこモテるくらいの容姿はしていると思う。

まあ、マリコル又は原作でも、一応彼女作っただくらいだしな。

その経緯はよく分からんけど。

だから、それなりに磨けば光るものは持っていたんだろうさ。

まあ、イケメン⇨モテる。とは限らんからあまりそっち方面は期待はしてないね。

何だかんだで女子というのは器量の良さとかそういう部分で評価したりするしさ。

生前の俺はそういう部分が足りなかったから、彼女の一人も作れんかった(泣)。

せっかく転生したんだから、そういう部分も気を付けてみようかね。あゝ入学式が楽しみになってきた。

それが捕らぬ狸の皮算用だとしてもさ。

そして忘れちゃいけない、この世界においては何よりも大事な魔法だが、系統は勿論『風』。

流石は風上のマリコル又だ。

そこは原作通りなのね。

取り敢えず入学前までにラインクラスまで上げておいた。

凄いだろ！

……え？

大したこと無いじゃないかって？

……無茶言つな！

魔法の勉強が如何に無理難題か、原作か二次作品読んだのなら分かるだろう！

あんな抽象的なもん、理解しろって方が無謀だ！
仮に理解しても、実践はまた別。

ようやくと理解しても使えるまでにえらい時間が掛かる。

その間、杖振りっぱなしで腕が筋肉痛で痛い痛い。

いやあ、才能無い奴は心折れるね、これは。

……っーか、二次作品だとかこういう場合は入学前にスクウェアクラスの実力が当たり前！な感じだったが、そんなの無理無理無理無理！マリコルヌの資質の問題か、俺の努力が足らんのかは分からんが、ラインまで来れたことさえ奇蹟だよ。

まあ、独学でやれることにも限界ってのがあわけよ。

特に今の俺は何処その公爵家の子供でもなく、何もコネもない、ただのマリコルヌに過ぎない。

後は学院で勉強して、上手く行けばトライアングル行けんじゃね？
って感じだな。

いやあ、トライアングルクラスと目されるタバサやキュルケが如何に天才なのか実感したね。

その特異な境遇からあの年齢にして実戦経験豊富なタバサはともかく、努力と才能でそこまで持って行ったキュルケは本気で凄いなと思
うわ。

ワルドのスクウェアとかマジ有り得ねえって。

まあ、何だかんだでもうすぐ入学式だ。

原作開始が時系列通りなら、再来年には才人と出会えるわけか。

ぶっちゃけた話、俺はルイズと才人があまり好きじゃない。

ルイズなんて最初の頃はただのクズだからなあ……。

それまでの経緯や成長前という免罪符があつたとしても、それだけじゃ俺はやっぱ許せんというか好きにはなれないわ。

どのみち、典型的なエゴイストな部分は変わらるので、やっぱり好きにはなれない。

俺もそこそこエゴイストではあるが、流石にこの御方には負けると思うね。

そんでもって、そんな女に惚れる才人。

……誰に惚れるかなんぞ、正に人の勝手なのだが、この時点ですてもお近づきにはなりたくないわなあ。

しかも、才人は才人でまた欲望に忠実というか何というか……。

ハーレム系主人公の中でもこいつは某誠氏ねとは別のベクトルで最悪だと個人的には思う。

ルイズに比べりゃまだまともだけど、好き嫌いで言えばやはり嫌いになるなあ。

まあ、マリコル又はそこまで才人と親密にはならないし、普通にしたらそんなに関わらんだろうさ。

とは言え、何もしないのも面白くないので、ちょこちょこ介入してやろうかなあ？とはぼわーっと考えてはいる。

それもこれも入学して、使い魔召喚の儀式を迎えてからの話だ。来年の話をするとう鬼が笑うって言うし、今はそういう心持ちだということだけ表明しておくに止めるか。

さて、入学式まで風魔法の勉強でもしておくとしますか。

ラインになったはいいが、鍛錬をサボつてるとすぐにドットクラス

まで落ちかねない。

日々のたゆまぬ努力が精進への唯一の道。

……面倒臭え。

努力という言葉が死ぬほど嫌いな俺に何という仕打ちだ。

いやあ、トライアングルクラスにスクウェアクラスの方々によっほど陰で努力なさってるんでしょなあ……。

仮にもスクウェアクラスのギトー先生とかマジ尊敬ものだわ。

同じ風系統だし、入学したら彼に師事してみようかなあ？

原作で風最強、風LOVEを公言するギトー先生だから何だかんだで親身になって教えてくれそうだ。

うん、また一つ入学が楽しみになったぞ！

……多分。

まあ、俺は努力は嫌いだが、結構凝り性で極められるなら極めたいという気質もあるからね。

それと同時に諦めの良さもある。

やれるところまでやってダメならそこで諦めるぞ。

そんなこんなで俺は無事入学式の日を迎え、トリスティン魔法学院へと籍を置くこととなったのであった……。

原作前夜……まあ、色々ありました。

トリステイン魔法学院へ入学してからの一年間。

長いようで短かった。

まあ、それなりに楽しくは過ごしたね。

入学早々、俺はギトー先生に弟子入りし、マンツーマンでレッスンを受けた。

同じ風系統ということで、ギトー先生は俺に結構好意的に接してくれる。

原作だと嫌みな奴で、ともすれば悪役扱いされることもあったギトー先生だが、こうして真摯に向き合うとなかなか教育熱心ない先生だと分かる。

人は見かけによらないねえ。

ギトー先生のレッスンはとても分かり易く、独学で限界のあった俺の壁をあつさりと超えさせてくれた。

元々、ギリギリでラインクラスだった俺はこのレッスンのお陰で、一年でトライアングルに匹敵するまでに成長出来た。でも、まだラインだけだね。

ギトー先生曰わく、このままなら卒業するくらいならトライアングルを極められると太鼓判を押ししてくれた。

嬉しいんだけど、やっぱりスクウェアまでは行かないのか……。

つくづく、この人やワルドの凄さを思い知る。主人公補正やガンダールヴの力があつたとは言え、素人の身でワルドを追い詰めた才人は何気に無茶苦茶だったんだな。俺には無理だわ。

所詮、脇役ってことか。

まあ、生前は脇役どころかモブの一人くらいの存在でしか無かった
ろうから、役を貰えただけでも昇進したと言えるか。
悲しいポジティブシンキングだな（泣）。

とは言え、原作のマリコル又よりは今の俺のが明らかに強い。
トライアングルに匹敵するラインというだけでも充分と言える結果
だろうさ。

ギーシュなんかトップレベルとは言え、まだまだドットクラスだし
な。

そうそう、そのギーシュとは何やかんやで友人関係にある。
切っ掛けはよく覚えていない。

……お前らだって、今の友人と仲良くなった切っ掛けを鮮明には覚
えていないだろう？
それと同じことだ。

確か食堂で一言二言話したことが俺とギーシュのファーストコンタ
クトだったと思うが……まあ、そんな取り立てて言うような特別な
イベントが無かったのは確かだよ。

最初に交わした言葉も挨拶とかそんなもん。
それから何度か話していたら何時の間にか仲良くなってたって感じ
だよ。

まあ、コミュ障レベルの人見知りか友人なんていらんと誓いを立て
ていない限りは、友達なんてそんな風に何時の間にか作られるもの
だよ。

簡単では無いけどね。

俺の場合は原作でもマリコル又とギーシュが仲良かったのが上手く
作用したのもあると思われる。

多少は原作の強制力みたいなのが働いたのだろうか？

まあ、それは追々分かることだろうさ。

仲良くなった俺たちはよく下らないことで笑い合っていた。

コルベールにピッタリのツラは何だとか、オールド・オスマンは本当に300歳なのかとか。

時には男同士で恋バナとか結構気色悪い会話をしたりした。

そんな風に過ごしていると、何となく生前の友人たちとの会話を思い出した。

内容は完全なヲタ話だったが、こんな風にお互い笑い合っていたっけか。

懐かしいねえ。

そんなわけで俺とギーシュはよく一緒にいることが多かったが、それぞれイケメンなので（自分で言うところばずかしい〜）女子からの注目度が低くはなかった。

原作通りなら、マリコルヌは明らかにギーシュの引き立て役だったんだろうが、今の俺はそこそこイケメン。

ぶっちゃけ、それなりにモテた。

流石にギーシュには叶わなかったが、それでも結構女子がちやほやしてくれたのは生前には無かったことであつた。

そんな感じで俺たちに接してくる女子の中に、あのモンモランシーがいた。

モンモランシー……名前だけ抜き出すと、何かふざけた感じがして、どうも落ち着かない。

二次作品とかで真面目なシーンで「ミス・モンモランシ」とか言われると、何か空気が壊れるような気がしたりしなかったり。

多分、俺だけなんだろうが。

もしかしなくても実際に存在する人名なのだろうけど、やっぱりちよっと気になるでしょ。

ちゃんとした名前なのに、何となくギャグっぽい。

気にしなきゃいいんだが、気になるもんは気になってしまっ。

「ミスタ・グラントプレ、どうしましたの？そんなにじっと私の顔を見て……」

そんな風にボーっと考えていたら、早速モンモランシーに声を掛けられた。

ちよつとだけ頬を赤らめている。

照れておるのだなあ。

まあ、年頃の娘さんがそれなりのイケメンにじっと見つめられれば、その気がなくともこれに近い反応はするだろう。

そこに気付かない程、自分は色恋沙汰に疎いわけではない。

ボーイによく有りがちな「あれ？こいつ俺に気があるんじゃない？」的な勘違いなど、俺にとっては2000年前に既に通った道だ！

……威張れることじゃねえな。

しかし、物憂げな顔しながら「君の名前は変だなあ」と考えていたとは、まさか彼女も思うまい。

それをわざわざ告げる程俺は非常識ではないので、特に何も答えずに視線だけ逸らした。

すると、ギーシュがニヤニヤと笑いながら俺の肩に手を置いてきた。

「何だい、マリコルヌ。君はミス・モンモランシーに気があるのかい？」

うーん、殴りたい。

しかし、ここで下手に反応すると、そういうことにされかねない。

「あー、やっぱり好きなんだー！」みたいな。

そうなたらなつたで俺は別に構わないが、彼女は困るかも知れん

しなあ。

それにしてもギーシュは何か余裕綽々な感じの言い方だなあ。後のお前の嫁が友人に取られるかも知れんのだぞ？

それとも、この時点ではまだモンモランシーのことをそこまで好きじゃないのだろうか？

もしくはモテる男の余裕という奴だろうか。

俺とて、そこそこモテる方だとは思うんだがなあ。

……まあ、持って生まれたものの差なんだろう。性格とか気質とかそっちのね。

確かにモンモランシー自体はそれなりに可愛いとは思っよ。

ドリルのようなロール髪はそんな好きじゃないが、女子の中でも上位に入る容姿だと思う。

とは言え、彼女は俺のタイプじゃあない。

自分が女性を選び好み出来る立場じゃないのは重々承知しているけれどもね。

まあ、変な誤解を与えるのはお互いに良くないので適当に誤魔化すとして。

「いやあ……ミス・モンモランシーの髪はいつ見ても凄いなあ、と思ってさ。それ、毎朝セットするの大変でしょ？」

俺がそう言っつと、モンモランシーは「あら、そういうこと？」みたいな顔をした後、軽く「アハハ」と笑った。

「ええ、大変は大変ね。でも、このくらいの身だしなみは貴族の女としては当然よ」

「へー」

やっぱり大変なのか。

それならそんなセツトしない方が見た目的にもいいと俺は思うのだが、この世界の貴族的には大事なことなんだろうなあ。
銀座のママの髪盛りに加減みたいなもんなんだろう。

「なるほど、手入れを欠かさないからそんなに綺麗な髪なんだね、ミス・モンモランシ」

「まあ……ミスタ・グラモンはお上手ね」

くはあ！

そんな歯が浮くような台詞をナチュラルに言えるなんて……。
流石はギーシュ。

そこに痺れても俺は懂れない。

そんな感じで話していたら、何時の間にかギーシュとモンモランシ
ーはいい雰囲気になっていた。

なるほど、このまま原作へ続くってわけね。

まあ、来年になったらギーシュは後輩に浮気するのだが。

そんな時はなるべく穏便に済むようにフォローしてやるとするか。
何だかんだでギーシュは嫌いじゃないしな。

ああ、あと他の原作の主要メンバーとも出会ったよ。

タバサは図書室で本ばかり読んでたし、キュルケは男を漁ってた。
こいつら、原作に入る前から変わらんのな。

ちなみに俺はキュルケに一度も誘われることはなかった。

どうも彼女は自分に言い寄らない男はアウトオブ眼中らしい。

逆に彼女へアプローチした男で、お眼鏡にかなった者はそのまま頂
いちゃうみたいだ。

才人はたまたま決闘での勇姿を目の当たりにしたから、彼女の微熱（笑）が燃え上がったんだろう。そういうのはレアケースらしい。まあ、好きにして下さいって感じだなあ。キュルケもタバサも特に好きでも嫌いでも無いキャラだし、俺に変に関わってこないのであれば割とどうでも良かったりする。

そして、来た来た来ましたよ。

ゼロのルイズさん。

早速、爆発やらかしてくれました。

お陰でかなり疎まれておりますなあ。

うーん、まあ当然というか妥当な反応だな。

だって爆発だぜ？

間近で見たけど、ぶっちゃけ鳥肌立つちゃったよ！

下手すりゃ死傷者出ますぜアレ。

改めて同情の余地無いよ。

原作だと軽いイジメみたいな感じだったけど、間近で見た者として

は、こいつを排除したい気持ちが良い分かる。

更にあのお馴染みの自己中心的な性格。

原作での扱いは必然の結果だったわけだな。

寧ろ、まだ軽いとさえ思うもの。

原作通りならマリコル又はこの反ルイズの輪の中で率先して彼女を

口撃していたのだろうが、俺は敢えてしなかった。

というか、ルイズとあまり関わろうとしなかった。

だって、原作以前のルイズをアレコレしても面白くないじゃない。

何かするなら、召喚の儀式の後って入学前に決めていたんだよね。

原作通りだろうと、そうで無かるうとね。

彼女の成長を妨げるのがルイズ嫌いな俺の楽しみでもあるし、成長しようのない今手を出しても面白くないじゃない。

うわあ……俺って極悪人だなあ。
自覚してる分、尚タチが悪い気がする。
でもまあ、止める気は無いけどね。

そうそう、噂のマルトーの料理を食べたけど、感想としては正直そんなでも無かったな。
ぶっちゃけ、生前に食べた料理の方がマルトーの料理よりも美味かったなあ。

無論、調味料や素材といった違いはあるのだろうが、それにしてもこの程度の腕前で「あいつら貴族の連中は味が分かっていない」とか、あのオツサンは自意識過剰にも程があると思うぞ。

某新聞社勤務の某美食家がこの料理を食ったら、ボロクソ言われること必至だろうなあ。

「こんな角煮は食えないよ」的な。

ついでにシエスタにも出会った。

けれどもシエスタもそんなに好きじゃないんだよなあ。

原作だとそうでもないのだけれど、二次作品でやたら肉食なシエスタ見てたら何となく嫌になってきた。

二次作品で嫌いになるとか、原作に対して愛が無いなあと思われるかも知れんが、そもそもゼロ魔自体、自分の中でのナンバーワンというわけじゃなきにけりなのよさ。

……思わずローラ・スチュアート喋りになったが、そこはそういうものだとして欲しい。

まあ、そんな感じなのでシエスタには特に何もしていない。

そもそも俺は巨乳は好きじゃない。

微乳派なのだ。

したがって、シエスタにフラグが立つこともこの先ティファニアにフラグが立つことも無いだろう。

まあ、こんな感じで過ぎていった一年。

ようやく召喚の儀式にまで来ました。

そして、ここでプロローグ……おっと、ノムリッシュ風に言つとプロログスも終わりつてところだな。

さあて、どうなるかねえ。

楽しみのようなそつでないような……。

原作前夜……まあ、色々ありました。(後書き)

次回から原作ルートへ入ります。

召喚　そして原作は始まる？

召喚の儀式の日がついにやって来た！

原作もここから始まるからなあ。

否が応でも緊張するわ。

俺も使い魔を召喚するわけだしな。

しかし、俺の番が来る前にある意味ではこの日のメインイベントでもあるルイズの番がやって来た。

原作だとマリコル又は何時のタイミングで召喚を行ったのかは明記されていないかったとおぼろげながら記憶しているが、取り敢えずルイズの後に行われていたということか。

キュルケも確かルイズの後に召喚したみたいに言っていたしなあ。どうやらギーシュも同様みたいだ。

そう言えば、ルイズは例のアルビオンの時にギーシュの使い魔を初めて見たようなリアクション取ってたっけか。

召喚の時は誰が行うにしても、皆注目しているだろうし、それならば他人の使い魔でも一度は目にしている筈。

ルイズがギーシュの使い魔に見覚えがない、知らないということとは彼女のいない時に召喚されたと考えるのが自然、というわけか。

まあ、ルイズが才人を呼び出した後、召喚の儀式は一時的に中断されたし、その後ルイズが部屋から戻って来たという描写も無かった。要するに、その後の召喚の儀式は見えていなかったんだろうな。

辻褄は合っている。

そんな風に考えていると、何時の間にか目の前で大爆発が巻き起る。

その爆発は今までで最大規模と言っている。

爆風を受けながら、つくづくコイツは無茶苦茶だと再認識する。

これまでによく死人が出なかったものだ。と今更ながら思うよ。

生徒たちの安全を考えるなら、とつとコイツを退学にすべきじゃ無かるうか。

……ここからは俺の推測が入るけど、こんだけの危険行為が学院側に黙認されているのは、やはり公爵あたりから何らかの圧力があるんじゃないだろうか？

だって、実技試験さえまともに受かったことの無い言わば落ちこぼれが留年せずに俺らと一緒に二年生になってるんだぜ？

いくら筆記の成績が良かったとしても不自然だろ？

そもそも、留年だの何だの喚いていたのはルイズだけで、周りがそう言っていたような記憶は俺には無い。

その辺、本人の預かり知らない部分で何か後ろ暗い事情がありそうな気がして仕方無い。

うーん、やっぱり俺はコイツを好きにはなれんわ……。

その後の大まかな流れは基本的にはテンプレ通り。

簡潔に言つと、

？才人召喚

？ルイズがコルベールへ抗議

？抗議は認められず、仕方無く無理矢理契約

？召喚の儀式中断

とまあ、こんな感じ。

俺らの『サモン・サーヴァント』はその後、別の時間帯で行われる

こととなった。

召喚の儀式再開までの間、俺らの間ではルイズの使い魔……つまり才人について話題になった。

ギーシュもこの手のゴシップには興味津々のようだ。

「マリコルヌ、君はミス・ヴァリエールの使い魔についてどう思う？」

「うん。『サモン・サーヴァント』で平民とは言え、人間を召喚したというのは流石に驚いたよ。今まで聞いたことさえないからね。普段から爆発ばかり起こす非常識な奴は、使い魔さえ非常識というわけだ」

「君は手厳しいな」

「……ギーシュ、常識的に考えてみる。最早あの爆発が日常化し、感覚も麻痺して久しいが、爆発は爆発だ。巻き込まれれば腕や足の一つや二つ、千切れ飛んでいても不思議じゃない。そんなことが毎日毎日間近で行われているんだぞ？しかも、人為的に」

「……そう言われると身震いがするな」

「それが普通感覚だよ。正直、彼女は危険人物として退学処分となってもおかしくないと思うよ」

「……それは無いだろうな。何たって彼女はヴァリエール家の人間。ヴァリエール家と言えば国内でもかなりの力を持っているからね」

「そんな彼女を易々と退学処分になんて出来ませんってわけか」

「まあ、そこまでは言わないけど……」

「死人が出たらどう責任を取るんだ？ 全く、ヴァリエール家とやらはとんだ疫病神……」

「ミスタ・グランドプレ。君の番だ」

俺が言い終わらない内に、コルベールの代わりに召喚の儀式を執り行うことになったギトー先生が俺の名を呼んだ。

俺はギーシュとの会話をちゃっちゃと切り上げて、ギトー先生の所へ向かう。

ようやく召喚かあ。

まあ、俺はちゃんと魔法を使えるし、失敗することは無いだろう。リラックスリラックス。

「ミスタ・グランドプレ。『サモン・サーヴァント』を」

ギトー先生はそう言った後、俺だけに聞こえるように耳打ちする。

「……ミスタ・グランドプレ。ミス・ヴァリエールだけならともかく、あまり大っぴらにヴァリエール家のことを悪く言わない方がいい。誰に聞かれるか分からないからな」

ギトー先生の言葉に俺はハツとなる。

ヴァリエール家は国内でもかなりの力を持っていて、それは王家にさえ匹敵する。

そんな大物をこんないち貴族が批判したら、一族ごと潰される可能性だってゼロじゃない。

……俺としてことが迂闊だったな。

嫌いな気持ちが行先して、ちよつと気が緩んでいたみたいだ。

目立つような真似はしないと決めた筈なのに、公然の場で公爵家批判とか……。

猛省！！

俺、猛省！！

「…………肝に銘じておきます」

「うむ、気を付けたまえ」

そう言つてギトー先生は俺の肩を優しく叩いてくれた。

…………やばい。

俺が女ならちよつと惚れてるかも知れん。

こんだけ俺にとっては素晴らしい教師であるギトー先生だが、ギトーも含め他の生徒からは正直なところ、あまり好かれてはいない。嫌われているというよりは風最強、風LOVEを提唱し続けるが故にウンザリされているって感じた。

逆にそれさえ無ければギトー先生は誰からも好かれる教師になっていたかも知れない。

教えるのも上手いし、率先して上位の魔法を見せてくれたりするしね。

ちよつとしたボタンの掛け違いって奴なんだろう。

これからルイズにちよつかいだす時は、こつそりとやることにしよう。

まかり間違つても、直接手を上げたりするのは厳禁だな。

まあ、嫌いとは言え女子に暴力振るうような真似は俺の性格的にも出来ないが。

「さあ、ミスタ・グランドブレ」

ギトー先生に促され、俺は目を閉じて『サモン・サーヴァント』の魔法を唱えた。

すると、光とともに目の前へ一羽の鳥のような生き物が現れる。羽毛に覆われ、クチバシがあるから鳥だと思う。

鳥と言っても鳩やカラスなんて感じじゃなく、サイズにいたっては大型の鷲くらいはあったから、どっちかと言えば鳥のモンスターって言った方がいいかも知れない。

だが、物凄く美しい。

色とりどりの羽根、黒曜石のように磨かれたクチバシにダイヤモンドのような爪。

全身から漂う気品はこの場にいる誰よりも貴族然としている。

その姿に思わず見惚れていると、使い魔は閉じていた瞳を開けて俺を見た。

目と目が合う。

その何にも例えようのない美しさ……それでいてまるで少女のような艶やかさに俺は思わず息を呑む。

改めて美しい。

そして、可愛い。

周りの生徒たちも思わず押し黙って、俺が呼び出した使い魔を注視していた。

「……ミスタ・グランドブレ、『コントラクト・サーヴァント』を」

「……………あ、はい！」

ギトー先生に言われ、俺は慌ててその使い魔に向き直った。
そして口づけをしようとして、少し戸惑う。

正直、この使い魔は俺には分不相応過ぎやしないだろうか？

使い魔を見ればそのメイジの実力が分かる。とは言うが、この使い魔はどう見てもラインのメイジが呼び出せるレベルの使い魔じゃ無いような気がする。

大体、マリコルヌの使い魔って確かいかにもハリー・ッターに出て来そうなフクロウじゃなかったか？

こんな何とも形容し難い高位な感じの使い魔じゃなかっただろ！
本当に契約していいのか？これ？

『何を戸惑っておるのだ？』

！！

頭の中に声がしましたよ、皆さん！

何だ何だ？生き別れの双子の兄が俺にテレパシーでも送っているのか？

『何を意味の分からんことを言っておるのだ』

……………これって、やっぱりアレだよな？

声の正体は目の前の使い魔だよな？

『当然であるっ』

ほほっ……………。

テレパシーが使える使い魔ですか。
ますます高位な存在じゃ無いですか！

『別に念話くらい、どうということとは無いぞ。……ところでお前は
私と契約を交わさぬのか？』

へ？

いいの？

こんな俺で？

『良いに決まってるから言っておるのだ』

でも、何というか……あなたにとって俺なんて役不足なのでは？

『今釣り合わぬと思うなら、釣り合う男になってみせれば良いであ
ろっ』

……何か男前ですなあ。

さっきまで尻込みしていたのが恥ずかしくなってきたよ。

『ちなみに私はお前たちの概念で言えば雌にあたる』

雌……つまり、姉御ってわけですか。

『……下らんことを言っていないで早く契約せよ。こうしていても
埒があかんだらう？』

うん。

そだな。

本人もいって言ってるし、いいよな！

俺は使い魔のクチバシに口づけをした。
使い魔の体にルーンが刻まれる。

こうして、俺の使い魔がここに誕生した！

……えーと。

『名か？ローと呼べ』

えー、オッホン！

こうして、俺の使い魔『ロー』がここに誕生した！

で、あの……ローさん。

あなたは一体何なんですかあ？

召喚 そして原作は始まる？（後書き）

使い魔は完全なオリジナルです。

イメージ的にはハリー・ Potter のダン ルドア校長の不死鳥みたいな感じですね。

名前やキャラにも元ネタはあるのですが、こちらは秘密です。

感想ありがとうございます！

返信の方は余計なこと書いてしまいそうなので控えさせていただきますが、

必ず読みますので、引き続き感想をお願いします！

召喚の夜

召喚の儀式が終わった。

あの後、他の原作メンバーはちゃんと原作通りの使い魔を呼んだよ。ギーシュはジャイアントモールのヴェルダンデ、キュルケはサラマンドラーのフレイルムといった感じだ。

しかし、俺だけが原作とは明らかに異なる使い魔を呼んでしまった。見た目もキャラもゼロ魔では見たことの無い存在である。

かと言って、他の作品の登場キャラ……というわけでも無い。

つまり、謎の鳥。

それと使い魔の纏うオーラがあまりにも異質過ぎる。

うーん、俺が所謂転生者だからこういう不測の事態が起きたのだろうか？

他の皆が原作通りなところを見る限り、その可能性が高そうだな。

…… ああ、早速原作から外れてしまいましたよ。

まあ、その他の出来事は原作通りなので、全く別の世界になってしまったというわけでも無いのだろうがね。

とは言え先行きは不安っちゃん不安だ。

「ああ、ヴェルダンデ！可愛いなあー、こいつは！」

そんな俺の懸念などつゆ知らず、男子寮へ戻る道すがらギーシュは先程からヴェルダンデと戯れている。

このまま部屋まで連れて行くつもりなのだろうか？

俺のローくらのサイズならともかく、人一人分くらいの大きさの土竜など部屋にいたら邪魔では無いか？

しかも、こいつは大人しくするということは無く、まるで陵辱するが如くギーシュに擦り寄ってくる。素晴らしい愛情表現だが、四六時中こんなだったら流石に嫌にもなってくるのでは無いだろうか？

しかし、ギーシュはそんなことは意に介さず、寧ろ自らもヴェルダンデを求めている。

重ね重ね素晴らしい主従関係だ。

ギーシュがそれでいいと言うならば、友人である俺は何も言うまい。

「どうだい、マリコルヌ？僕のヴェルダンデはとても気高く、美しいとは思わないかい？」

「親馬鹿……ならぬ使い魔馬鹿だな」

「ハハハ、君の使い魔も僕のヴェルダンデに負けず美しい姿をしているじゃないか。鳥……にしては見たことの無い種類のようなだが」

そう言いながらギーシュが俺の肩に乗っているローへ手を出した。

ローはクチバシで擦るようにギーシュの手を甘噛みする。

「ハハハ、利口じゃないか」

ギーシュはローの頭を二、三度撫でると、再びヴェルダンディと戯れ出した。

その様子を呆れながら見た後、俺もローの頭を撫でてみる。

ローはとても気持ち良さそうな顔で俺に体を擦り寄せてきた。

艶々としたシルクのような羽毛は肌触りがとても良く、顔の間にあっても埃っぽさとか咽せる感じが全くしない。

それでいてふわふわなので、何時までもそこに顔を埋めたいくらいだ。

……は！

イカンイカン！

このままじゃやってることがギーシュと変わらんではないか。
今の俺は人前で見せられるような姿では到底無いぞ。

自重、自重。

……ローを可愛がるならせめて人目の付かない自分の部屋でやるとしよう。

そう自分に言い聞かせて、そのふわふわ艶々な羽毛の中に顔を埋めたい衝動をぐつと抑えながら歩く。

チラッとギーシュを横目で見てみると、相変わらず周りなど気にせず、ヴェルダンドとイチヤイチャしている様子。

くっ！何か女子たちと（それはモンモランシーだったりそうじゃなかったり）イチヤイチャしているのを見るよりも、何故か苛々する！

俺は視線をローへと戻す。

ローは「全て分かっているぞ」とでも言いたげに羽を広げ、何時でもウエルカムという体勢を取っている。

……。

……。

俺は我慢出来ずにローの羽毛の中へ顔を埋めた。

「……どうも俺たちは似た者同士らしい」

「……？何か言ったかい、マリコルヌ」

俺の呟いた言葉はどうやらギーシュには聞こえなかったみたいだ。

ようやく自室へ戻った俺は、何時までもふかふかしていたい欲求を抑え、早速ローへ問い掛ける。

「ロー、お前は一体何なんだ？」

……我ながらどストレートな言葉だ。

もう少し言葉を選べたろうが、あまり回りくどくするのも得策では無い。

ローは暫く目を閉じた後に答えた。

『……直接的ではあるが、答えるのがなかなか難しい質問ではあるな。……私はロー、お前の使い魔だ。それでは不服か？』

あ、そう言えば心で会話出来たっけ。

じゃあ俺も心の声で、と。

……不服では無いけれども、納得は出来ないな。

ローはただの美しい鳥、と決め付けて思考停止するのは簡単だ。だけど、それで片付けていい問題ではないと思う。

第一、お前はこの世界の生き物じゃないだろ？

見たことも聞いたこともない。

ギーシュも知らないと言っていたしな。

『そうだな……。確かに私はこの世界の者では無いぞ』

やっぱり！

異世界から来たのか。

『異世界、という言葉はこの場合相応しくない』
……？
どういうことだ？

『私は天から来た』

天？

『要するに神のいる場所だな』

神……！

『そうだ。私は神鳥。つまり、神の鳥なのだ』

マジか……。

そんな凄いのが何故、俺の元へ来たんだ？

『お前は転生者なのだろう？』

！！

やっぱり分かっていたのか……。

そして、転生者という立場だからローを呼び出せたというのも間違っ
つてはいなかった。

俺はローに向かってこくりと頷いた。

こんなことで嘘を吐いても始まらないし、何よりローには全て見透
かされそうだったから。

『そして、お前は転生者の中でも特に珍しい存在だ』

へ？

珍しいって何が？

転生してる奴って結構いるんじゃない？

他称・神or悪魔の話だとき。

『転生に必要な条件をお前は知っているか？』

それも他称・神or悪魔が言っていたな。

確か自殺しないってことじゃなかったっけか？

『それは正確には異なる。正確には寿命を全うする、または不慮の事故で命を失う。というのが転生の条件なのだ』

……それって、どう違うわけ？

『例えば自らの不摂生で病気になり、それで死に至ったとすれば、その者は転生の資格を失う。自分で死を招いたのと同意義だからな』

なっ！？

『自ら死を招く者は転生の資格を失う。転生の資格を得る為には最後の最後まで死を拒み、生き抜いくことが必要なのだ』

そうだったのか……。

『……お前は幾度も転生を経験している。覚えておらぬということはいずれかのタイミングで過去のお前が記憶を消去したのだろうが、それはとても珍しいことなのだ』

……確かにローから聞いた条件だと、転生を重ねるといことが如

何に難しいか何となくだが分かる。

現代の日本では、大抵の人間は寿命が尽きる前に病気で死んでいる。個体差はあれど、病気さえしなければ人間は100歳くらいまでは生きるとは十分可能なのである。

そして、病気というのは伝染病などでは無い限りは大抵が日々の積み重ねが原因で発生する。

つまり、殆どの人間は転生の資格を失ってしまっているということなのだ。

そう、転生はその死に自らの因子が少しでも入っていたらアウトなのだ。

例えば、車に轢かれて死んだとしても、そこに自らの過失……例えばギリギリ赤信号だったとかそういうのがあったら転生出来ないということだ。

……俺は暴漢に襲われて殺されたのだと言う。

これも一歩間違えば転生の条件は満たせていなかったということだ。転生とは少しの乱れがあったらダメなのである。

全く記憶には無いが、それを何度も繰り返したということは確かに珍しい……というか異常なことだとさえ言える。

『私がお前のところへ来たのは、きっとお前のその特異な因子が原因なのだろうな』

特異な因子……。

異能生存体みたいなものか？

ああでも俺は毎度死んでるから違うか。

そもそも、つい最近は暴漢に襲われて死んでるしな。

「……つまり、ローが俺の元へ来たのは、俺がこの世界において特別な存在だから。ということだな？」

俺は敢えて口に出して言った。
それは自分に言い聞かせるという意味もあった。

『そうだな。それで間違いはない』

ふーむ。

俺は特別な存在だったのか。

まあ、転生している時点でそうだよな。

何か当たり前みたいに思ってたけどさ。

とは言え、今の俺はマリコル又。

この世界においては脇役の一人に過ぎない。

それも活躍はしない方のな。

にしても神の鳥かあ……。

そこはかとなくチートの予感。

『……言うてはおくが、私にあまりそういうのを期待しないで貰いたい。所詮は神の元にいる鳥なのだ。鳥は鳥に過ぎぬ』

あ、そうなんだ。

『だが、全力を以て主であるお前を護ることは誓おう。私はお前を見捨てたりはしない』

……泣ける台詞だ。

こんなに力強く、こんなに温かい言葉を頂いたのは何時ぶりだろうか？

しかし、何時までも『お前』は他人行儀過ぎる気もするなあ……。

『お前はお前だろっ?』

『お前』は俺だけに当てはまらないじゃないか。
例えばギーシュだって『お前』だ。

……よし、ローには俺の生前の名を教えてやるよ。
今度からはそう呼んでくれ。

『分かった』

俺の名はタダオ。

生前の名はタダオだった。
そう呼んでくれ。

『タダオ……か。タダオ、タダオ……。タダオ!』

ローは目を細め、俺の肩へと乗っかって来た。
見た目の大きさに比べ、肩へ乗っかられていてもあまり重さは感じない。

文字通り羽のような軽さだ。

俺はローの顔前に手を差し出した。

すると、ローは俺の手を甘噛みしてくれる。

先程ギーシュにしたのよりも長く優しく。

俺はもう片方の手でローの頭を優しく何度も撫でてやった。

こうして、召喚の儀式のあった一日は終わりを迎えたのであった。

召喚の夜（後書き）

次回からまた原作ルートへ戻ります。

ミスがあった為、一部テキストを修正しました。

原作への介入、始めました。

召喚の儀式から翌日。

原作通りに例の授業中の爆発事件が発生しやがりましたですよ。盛大に爆破した教室の中で他の連中の使い魔たちが右往左往している。

俺のローは至って冷静に肩の上でじっとしている。

『タダオ……話には聞いていたが、実際に見てみるとこれは凄いな』
ローは感心したように喉を鳴らす。

こっちにしてみれば毎度のことだし、寧ろ最近はルイズに人前で実技させるのを控えるということ教師側がようやく覚えたので、久方振りの爆破といった感じた。

これもシュヴルーズ先生がルイズの実技を一度も見たことのないのが原因で、愚かにも授業中に使い魔である才人と私語をしていたルイズに罰として壇上で錬金をさせようとしたのである。

キュルケが必死にそれを止めたのだが、ルイズと来たら生来の負けず嫌いキュルケ憎しで意固地になって錬金を強行。

結果、この惨状なのである。

ちなみにシュヴルーズ先生は爆風で後頭部を打ち付け気絶中。

これも当たりどころが悪かったらおっ死んでたな。

ルイズの失敗も最早日常化してるけど、やっぱり危険だね。

何が一番危険かって、爆発の張本人がその危険に無自覚なのがまた……。

当の本人は済ました顔で顔の煤を拭いた後に悪びれる様子もなく一言。

「失敗しちゃいました」

……じゃ、ねえよ！

おんどれは失敗で人を殺す気か！？

今回は使い魔同伴だったから使い魔だって死んだかも知れない。

その可能性も考えずに魔法を行使したのか！？

……ああ、召喚と契約に成功したから、きっと他の魔法も……って
思っただらうねえ。

召喚の時すら爆発かましてたのに、そんな急激に変わるわけ無いだ
らうが！

と、言っただとところであのエゴイストが聞き分ける筈も無し。

どの道、この爆発は起きていたんだらうさ。

ならば避けるべきだったのだが、生憎と俺は授業をサボれない体質
でね。

いるだろ？

辛くて学校なんか行きたくないと思っただと、結局学校に行っ
て辛い目に遭う奴。

俺がまさにそれ。

真面目と言えば聞こえはいいが、その実サボリに対するビビリがあ
ることに他ならない。

要するにヘタレなんだな。

まあ、そんなこんなでシュヴルーズ先生の授業は終了し、昼食の時
間だ。

そして、原作や二次作品の流れならばここらで決闘騒ぎの切っ掛け
となる香水事件が起きる筈。

かくして、それは嘘みたいにあっさりと俺の目の前で起きた。

「……君のおかげで二人にレディーが傷付いた！どうしてくれるんだ！？」

ギーシュが頬を真っ赤に腫らしながらプツンマークが目に見えるくらい怒りに怒りまくり、相手の才人はポカーンとそんなギーシュを見つめている。

遂に始まったか。

決闘騒ぎの発端となるギーシュと才人の言い合いが。

まあ、ぶつちやけ悪いのは殆どギーシュなんだがね……。

ことの顛末が分からない人の為に解説すると、まず俺とギーシュとその他の友人との間で、ギーシュが誰と付き合っているかという話になった。

ギーシュはそれを明言することを避けたが、たまたま落とした香水を才人に拾われ、渡されてしまう。

その香水はモンモランシーがギーシュにプレゼントしたものののだが、空気の読めない友人Aが「ギーシュはモンモランシーと付き合っているのか」と大声でのたまう。

と、その場にギーシュが密かに交際……まあ、要するに浮気なわけだが、それをしていた後輩のケティが登場。

ギーシュがモンモランシーと付き合っていることを知り、ケティは彼の頬を叩きその場から逃げ出す。

更にそれを見ていたモンモランシーからも頬を叩かれ、事実上のW破局。

一度に二人の恋人を失ったギーシュの怒りの矛が香水を拾った才人の元へ向けられた。といったところだ。

まあ、二人のレディー云々はギーシュの完全な八つ当たりだね。

これは友人としても流石にフォローしきれないよ。

とは言え、このままの流れならまず間違いない決闘になる。

そうなれば、ギーシュは無惨に敗北。

才人は勝利し、ルイズと仲を深め、決闘で見たガンダールヴの力にオスマンたちが唖る。

という展開になるだろう。

そいつあ、ちよつと面白くない。

ここいらでそろそろ横槍つてのを入れてみるか。

俺は長年この横槍つて奴が苦手だった。

何かただの邪魔でしかないって気がしてな。

だが、その蟠りから飛び出さなきゃならない、飛び出さなきゃならないんだ！

つてな感じで黒沢的思考をした後に俺は二人の間に割って入った。

「よし、けつと……」

「ちよつと待て！」

俺はそう言った後にギーシュの口を無理矢理塞ぐと、そのままずらずると引きずってその場から離れた。

そして、誰にも聞こえないように声を潜めてギーシュに話し掛ける。

「……頭を冷やせギーシュ」

俺が静かに……だが、確実に相手へ聞こえるようにそう言つと、ギーシュも反論する。

「……止めてくれるなマリコルヌ。これは二人のレディーと、そし

て僕のプライドの問題だ」

「……殆どお前のプライドの問題じゃねーか！……いいか、よく聞け。相手は平民とは言え、あのヴァリエール家の人間の使い魔だ。それと問題を起こしてみる。下手すりゃ、お前の家にまで飛び火するぞ」

「うっ！？」

「……確かに空気を読まなかったアイツも悪いが、そもそもの原因はお前の浮気だ。それが分かればいくら相手が平民でもお前のが圧倒的に不利になる」

「……」

「……仮にアイツを叩きのめし、一時お前の溜飲が下がったとしても、その後に発生し得る問題を考えたら、それはあまりにも釣り合わないと思わないか？」

「た、確かに……」

「……悪いことは言わない。この場はこのまま収めるべきだ。お前の態度に勘違いしたアイツが調子に乗って何か言ってきたとしても、それに反応したらそれこそお前の負けだ。貴族は平民の言うことをいちいち気にかけない。そういう度量くらいはお前にもあるだろう？」

「……あ、ああ。僕は由緒正しきグラモン家の人間だからね」

「……なら、この場はこのまま収めるんだ。……何、モンモランシ

「このことは後で俺が何とかして取り持つてやるよ。お前の本命はこっちだろ？大事そうにモンモランシーの香水を持ってたしな」

「……………！？……………ほ、本当かい、マリコルヌ！？」

「……………ああ。俺たち、親友だろ？」

我ながら臭い台詞だとは思うが、ギーシュな目に涙を浮かべて感動している。

素直な奴だ。

好感が持てるね。

「……………マリコルヌ。君と友で本当に良かったよ」

ギーシュはがっしりと俺の手を取った。

そして、その後に表情をキツと戻してから才人へと向きり、一言「もういい！」とだけ告げ、背を向けた。

言われた才人はつい先程まで売られた喧嘩は買ってやる的な態度だったので、このギーシュの急変にまたもポカーンとした顔をしている。

うんうん、これでいいこれでいい。

それにしても何だ、才人のその顔は？

ギーシュと戦いたかったのか？

……………野蛮な方ね！

その後、空気の読めない才人が一言二言余計なことを口にしたのだが、ギーシュは振り返らずに食堂を出て行った。

慌てて追いかけると、ギーシュはまるで阿修羅のような表情で、「あの平民、いつか殺してやる！」と物騒なことを呟いている。

うーん、素直に決闘させてやった方が良かったか？

ともあれ、これで決闘騒ぎはお流れとなった。

とは言え、原作の強制力みたいなのが発生して別の奴と決闘するんじゃないかとも懸念していたが、そんなことはなく、決闘しないまま次の日を迎える。

無論、決闘なんて起こる気配すらない。

どうやら完全に決闘イベントは消滅したみたいだ。

これで、才人のガンダールヴ披露&ルイズとの仲進展は無くなったわけだが、虚無の日曜になると、どういうわけか二人で出掛けてしまった。

まあ、出掛ける理由までもが完全に消えたわけじゃないしな。

おおよそ、見栄っ張りのルイズさんが使い魔には剣くらい持たせないとでも思っただらうな。

二次……特にクロスものでよく使われる展開にシフトしたってわけか。

原作だと才人自ら剣が欲しいって言ってたと記憶してるしな。

どんどん原作から外れていっとなるなあ。

そう言えば、買い物イベントもそこそこ重要だしな。

特にデルFRINGER。

これが買い物イベントのメインディッシュみたいなものだしな。

よし、こいつも先に頂いてしまおうかな。

デルFRINGER無しで連中が何処までやれるか見てみたいしね。

最悪、フーケの盗みが発生しない可能性もあるが、その時はその時だ。

原作とは違う展開になるのもまた面白いだろうし、そっちも見てみたいしな。

そう思いを馳せながら、俺はローと共にトリスタリアまで出向くのであった。

原作への介入、始めました。(後書き)

毎日投稿としたかったのですが、昨日熱出して結局無理でした。
すみません！

あと、感想も有難うございます！

誤字や間違いの指摘などはドキッとしませんが、されれば時間が許す
限り直させて頂きます。

作者のゼロ魔知識も大分薄れてきている+思い込みとかあるので…
…。

虚無の曜日は色々あるなあ

虚無の曜日イントリスタニア。

トリスタニアはここトリステイン王国の首都で、様々な店が立ち並び、人々の往来も多い。

俺はこの街へ何度か来たことはあるが、ローはこういうところは初めてらしく、その可愛らしい眼をキラキラさせながら街の中を徘徊していた。

『タダオ！凄いいではないか！これが街か……うむ、凄いいぞ！』

喜んでおりますなあ。

可愛いのう……。

失礼ながら、この程度の街でこの喜びようなら、俺が生前にいた世界の秋葉原とか渋谷とかに連れて行ったら、ローはどんなリアクションをするのだろうか？

ぶつちやけ、このトリスタニアだって、そこらと比べたら最寄り駅周辺の商店街レベルの賑わいだぞ。

とは言え、国一番の都市というだけあって、それなりに大きいは大きいんだけどね。

『おお……！！タダオ、あ、あれは何だ？あれは？あれなんか何なんだ？』

ローは神の鳥だけあって、俗世間のものに疎く、それらがどうも刺激的らしい。

そんな風にローがあまりにもいいリアクションするから、ついつい寄り道しまくっちゃって、例の武器屋に着く頃には日も暮れてい

た。
うーん、彼女がいたらこんな感じなんだろうなあと思いつつ、相手が使い魔であることに多少虚しさを感じながら、俺たちは武器屋の中へと入った。

「……………いらつしゃい。おや？また貴族の方かい？……………今日はやたら貴族が来る日だな」

んん！？

武器屋の親父が何やら不穏なことを口にしたぞ？

やたら貴族が来る日？

正直、こんな日の当たらないような怪しい店をそう貴族の者が訪れるとは思えない。

事実、原作でもルイズたちが来店した時に武器屋の親父はそんなリアクションをしていた。

ということは、考えられることは一つ。

……………出遅れましたな。

念の為にデルフリンガーがあつたと目される場所をよく見てもそれらしき剣は見当たらない。

更に武器屋の親父の「やたら貴族が……………」という言葉を読み解くと、下手すれば、ルイズたちの後をつけてきたキュルケが既にあのぼつたくりソードをお買い上げになった可能性も高い。

やられた……………。

買い占めだ……………。

俺とローがデートしている間に武器を買い占められた。

イベント発生に必要な条件は全て満たされてしまった。

これでは、今晚あのフリーケイベントが起きてしまうのではないか！
このまま夜になればルイズとキュルケが才人にどちらの剣を使わせるかを賭けての勝負が行われる。
で、勝負の最中にルイズが例の爆発で宝物庫の壁にヒビを入れて、そこからフリーケが侵入して破壊の杖を強奪。
それを目撃したルイズたち一行がフリーケ討伐へ名乗りを上げ、フリーケと目される人物の隠れ家へと向かう……。
という原作の流れになってしまう！

……そこまで考えて、ふとキュルケは何であるのぼったくりソードを購入したんだろうと思った。

キュルケが才人を気にし出すのは先の決闘が切っ掛けである。
だが、そのイベントは消滅し、以後も行われていない。

それは俺も注意深くチェックしていたから確かだ。

では、何処でキュルケは才人を気に入ったのか……？

考えられるとすれば、やはり食堂の時か？

あの場は見ようによっては才人がギーシュを口でねじ伏せたように見えなくもない。

一応、平民と見なされている才人が口頭とは言え、貴族を言い負かしたのだから、人によっては興味も持つ……。か。

まあ、キュルケは結構先見の明があるからな。

青田買い、先物買いの感覚で才人に目をつけたのかも知れん。

或いは単純に、お家同士の確執からルイズの使い魔を奪ってやろうと思ったのかもな。

キュルケとルイズの家系は先祖代々から仲が悪い。

その理由が男を取ったり取られたりなんだから、才人が男な以上、キュルケに狙われてもおかしくはないか。

まあ、何にせよあの不毛な勝負をされたら、必然と連中はフーケの盗みの目撃者になってしまい、オスマンに呼びつけられてしまう。いくら目撃者だからって、子供を盗賊討伐になんかやらないだろう。なんて常識をここに期待してはいけない。

一応、何人かの教師はフーケ討伐へ名乗りを上げたルイズたちを咎め、止めようという常識的な発言をしたが、あの既にポケキったオスマンがその教師たちをあるうことが腑抜け扱いし、ルイズたちの考えなしの決断をいともあっさり認め、更に名乗り上げたことを勇氣ある素晴らしいことだとのたまったのだ。

正しき者が間違った者に敗北するという現実。

まあ、その思惑の中には才人のガンダールヴの力を見極めるといった意図があったわけで。

その力の片鱗さえ見えない今の状態で原作と同じ行動を取るかは分からんが、少なくともコルベル経由から才人のルーンが普通じゃない旨は聞いている筈だ。

なら、いくつか過程が飛んでも原作通りの行動を取るだろうというのは想像に難くない。

とどのつまり、ルイズたちのフーケ討伐は行われてしまう。

ぶっちゃけ、このイベントは序盤の最重要イベントである。

ここでフーケをとっ捕まえたという事実があるから、あのアホ姫がわざわざ忍び込み、才人に貞操を奪われつつもルイズへ手紙の件を打ち明けるのだ。

……まあ、あのアホ姫なら仮にフーケ討伐の件が無くとも同じ行動を取る可能性は否定出来ないがね。

それに、才人だけでなく、キュルケやタバサとの仲を大きく進展させ、ルイズたちは心身共に成長するという、厳しくもそれなりに実りのあるイベントなのである。

……ルイズ嫌いの俺にとっては虫唾が走るようなイベントだね。

無論、このイベント自体鼻歌交じりにこなせるようなものでは無く、ルイズたちはそれなりの苦難に立ち向かうわけなのだが、それでも気に食わないものは気に食わない。だが、既にイベント発生に必要なアイテムは全て連中の手の中だし、どうすれば阻止出来るのか……。

！！

閃いた！！

奴らの才人を巡る勝負を防げないなら、フーケがあの場合に行かないようにすればいいのではないか？

ルイズたちに干渉するのではなく、盗む方……つまりフーケに干渉する。

正に逆転の発想だ。

幸い、少ない原作知識のおかげでその正体も知ってるしなあ。

そうと決まれば、こうしちゃいられない。

俺はローを肩へ乗せると、馬を飛ばし急いで学院へと戻る。

さほどでもない乗馬技術ではあるが、限界を超えて120%の力を引き出したことで、同じ距離を走りよりも一時間早く走破することが出来た。

学院に着いた時には、馬が今にも死にそうであった。

俺は彼の走りを讃えるように体をさすってやり、馬小屋へと戻してやった。

余談だが、それから三日間その馬は死んだように動かなかつたが、四日目には元気になったそう。

例の勝負が行われる広場をチラッと見たが、まだ勝負は行われていないみたいである。

念の為、こっそりと宝物庫にも行って見たが、壁に穴は空いていなかった。

どうやら先程の武器屋の時とは違い、イベント前に辿り着けたみた

いだ。

「まず、第一関門はクリアってところか。

さて、ではフーケのところへ先回りしますかね……。

「……！？何でここに！？」

「夜分遅くに申し訳ございません。ミス・ロングビル」

目の前で驚いた顔をしている緑髪にメガネの妙齡の女性。

オスマン付きの秘書、ミス・ロングビルである。

何を隠そう、彼女こそが巷で噂の土くれのフーケその人である。

そして、本当の名をマチルダという。

フルネームは忘れた。

……まあ、今現在こんなん、知ってるのは俺だけだろうね。多分。

オスマンが彼女の正体を知っていながら敢えて雇った！みたいな二次創作もあるけど、真相は分からんから除外。

まあ、実際はあのボケ老人は彼女の正体を十中八九知らんだろうね。盗まれた直後の態度や対応を見る限りはさ。

それさえも演技だったとしたら、俺はオスマンにケツを差し出して永久に忠誠を誓ってやってもいいよ。

まあ、そんなんはどうでもよくて、今すべきなのは時間稼ぎ。

最悪、フーケの盗みは阻止出来なくてもいい。

重要なのはフーケが盗んだ時にルイズたちがその付近にいないということだ。

目撃者にならなければ、連中がオスマンに呼び出される理由は無くなるからな。

イベント阻止にはそのくらいの因子で充分だと思っ。

まあ、ルイズが宝物庫の壁にヒビを入れた場合、いつちよ前に責任を感じて自ら名乗り上げる可能性もあるにはあるが、そのくらいのリスクは敢えて残しておくのも乙なものだ。

別に絶対に何が何でも阻止したる！阻止しなきゃ世界が終わる！って程気負っているわけでもないからね。

気に食わないから邪魔をするって感じなんでこれくらいで充分だよ。たのしく、たのしく、やさしくね。

「……あ、ええと、確かあなたは……すみません名前を失念してしまいました」

まあ、いくら学院長付きの秘書でも生徒一人一人の名前を全て完璧に覚えるのは無理だよな……。特に俺みたいな脇役なんかさ……。

「……マリコルヌ・ド・グランドプレです。ミス・ロングビル」

「……ああ、そうでした。ミスタ・グランドプレ。……それで、何か私に用ですか？」

先程俺と鉢合わせた時には少々驚いた顔をしていた彼女だったが、すぐにポーカーフェイスへと戻ってみせる。

実に鮮やか、やはりただ者では無い。

だが、何処か苛立っているようにも見えるのは、俺が彼女の正体を知っているからだろうか？

彼女は彼女で腕利きの怪盗だし、大したことのない用事であれば何だかんだで上手くあしらわれてしまいそうだ。

とは言え、怪しまれないようにある程度はこちらに対応してくれるみたいだから、そのチャンスで何とかしないと。

「用……というか、何というか。実は、その……」

「その……?」

だが、そんな彼女を引き止めるような小粋な会話などなかなか浮かびはしない。

下手な話題ならすぐに切り上げられて、宝物庫へと向かってしまうかも知れない。

……な、何か無いのか?

少しの時間でも彼女をこの場に引き止められる話題は!?

「……実は」

「実は……?」

何か……!

何か……!!

「……実は恋の相談なのです」

「恋……?」

「はい……、私は……その……貴女に恋してるのです!」

「……はい?」

フーケとの夜

うあああああ！！

足止めの為とはいえ、俺は何てことを口走ったんだ！？

よりもよつて「貴女に恋をしています」だなんて……。

ギーシュ並みに歯の浮くような台詞だ。

ほら、フーケもちょっと引き気味じゃないか！

いや、フーケことマチルダさんは原作でも割と好きなキャラよ？

アウトローだし、でも意外と家族思いなところがあつたりとかギャップ萌え的な部分もあるし。

ワルドと変なフラグが立っているのだけが残念だけど、ゼロ魔に登場する女性キャラの中では凄くまともというか、好感の持てるキャラだよ。

でも、付き合いたいのか？と聞かれるとそれは違うんだな。

知り合いの一人としてなら最高だけど、彼女としてはちょっと違うと言つか、何か恐れ多い感じがする。

女性を選べる立場に無い男がまたまた何か言ってますよ。

愛の告白的なことをしている男が内心こんなこと考えているなんて、目の前の彼女は思ってもいないだろうなあ。

「……コホン。あ、ミスタ・グラントプレ？それは本気ですか？」

うわっ、割と真剣な目つきだ。

これは俺の告白を受け入れるにしても受け入れないにしても、とても真摯な返答をするつもりだ。

本気じゃなくて、スミマセン！
だ、だが、足止めだけはさせて頂きます。

「……申し訳ありません。こんなこと、いきなりなんて迷惑でしたよ。それもこんな夜分遅くになんて」

「いえ、あなたが本気だと言うのであれば無理も無いでしょう。寧ろ、恋に積極的に望ましいとも言えます。ただ……」

「ただ……？」

「私はあなたのことをよくは知らないのです。だからすぐに返事を……というのは出来かねます」

……うーん、こりゃあ完全に脈無しだな。

だが、俺が必要以上に傷付かないように慎重に言葉を選んでくれるのは嬉しい。

確かにその気は無いけど、だからといって振られるのはやっぱり辛いので、こういう配慮は心に響くね。

こんな腐れ外道にもこの気配り、本当にいい女だよマチルダさん。まあ、多少は学院長付きの秘書という仮面を被っているからこそつてのもあるんだろうけどね。

「知らないのであれば、これから知っていけばいいじゃないですか」
俺が食い下がると、彼女は暫く「うーん」と考えるような顔をした後、こくりと頷いてから言った。

「……分かりました。あなたの気持ちには後日、必ずお返事いたします。なので今日はもう部屋へ戻りなさい。こんな時間にうるついで

ていて他の教師に見つかったら、ただごとでは済まないかも知れませんが？」

その場で相手を傷付けることなく、更に話も打ち切る。

先送りではあるが、この後にちょっとした用事のある彼女にとってはかなりパーフェクトに近い回答。

かくして、この身を切った話も打ち切られてしまった。

……うーん、多少は時間を稼いだが、まだ充分とは言えないなあ。もうちょっと、引き延ばせないものか？

いや、あまりしつこく求愛すればストーカーみたいになるし、下手すれば有無を言わず振られるという強攻策を取られかねない。

何か別の切り口を探さねば……。

よし、多少危険だが、少し踏み入るようなことを言おう。

それぐらいでなければ彼女の気を引くことは出来ない。

だが、彼女もプロフェッショナル。

これまた下手すればこの場で彼女に消されかねないので慎重に言葉を選ばねば……。

「……実は、ミス・ロングビル。私は先日見てしまったのですよ。貴女に大きく関わることなのですが」

俺のこの言葉に彼女はピクリと反応する。

やはり、脛に幾つもの傷を持つ彼女はこの言葉を無視出来ないか。

一応、ポーカーフェイスを崩してはいないが、身に纏うオーラみたいなのが変わったような気がする。

何時でもやる準備は出来てますっていう感じだ。

……ここからが大切だ。

慎重に行かないとな。

「……見た、とは？」

彼女が当然の疑問を口にする。

感情をあまり込めず、あくまで事務的に。

だが、それがかえって殺戮マシーンの冷酷さを俺に感じさせる。
どっと冷や汗が出て来ちゃった。

「……ここでは何ですので、別の場所へ行きませんか？」

この言葉には彼女を宝物庫から遠ざける意味も含まれている。

廊下で何時までも突っ立って話をしているのは傍目から見たら怪しいし、何より自身の秘密を知っているかも知れない相手との会話だから、慎重な彼女ならこの言葉に必ず乗ってくれるだろうという算段があった。

「……分かりました。それで何処へ？」

「貴女の部屋……は流石に無理ですかね？」

「……」

うおっ！

小粋なジョークのつもりが少し睨まれた！

やっぱりマチルダさんこええー！！

どMなら最高のシチュエーションだったんだろうが、生憎俺はどちらかと言えばSなんでね。

この視線には恐怖しか感じないよ。

にしても、こんな一学生のジョークさえ軽く受け流せないとは、相当マジになっていると見える。

「ああ、じよ、冗談ですよ。……ちょっと歩いた先に今は使われなくなった教室があります。そこにしましょう」

「……」

彼女は何も言わずにただ頷く。

と、取り敢えず興味は引けたようで一安心。

俺はわざとゆっくり目に歩いて、目当ての教室までの時間を稼ぐ。遠回りするという手もあるが、彼女も学院内の構造くらいとつくに把握しているだろうし、すぐにバレてしまうだろう。

あまり怪しい行動を取れば、彼女とて俺に不信感を抱くだろうし、下手すりゃ殺されかねない。

これが精一杯なんだな。

「タダオ……タダオ！」

お？

広場を見張らせておいたローから念話が来た。

今、どんな感じだ？

『桃色の女が学院の壁にヒビを入れて慌てているぞ』

お、才人を巡る勝負はそこまで進んでいるか。

本来であればこの後、フーケのゴーレムがルイズのつけたヒビから宝物庫の壁を破壊して、中から破壊の杖ことグレネードランチャーを盗むんだっけか。

そのフーケは俺のすぐ後ろにいる。

後は連中がとつとあの場からいなくなってくればいい。

よし、じゃあ引き続き監視をお願いするよ。

『分かった!』

頼もしげに返事をするロー。

うーん可愛い使い魔だ。

部屋へ戻ったらまたふかふかしてやろう。

今はもう使われていない教室の前まで来て、ふと鍵でも掛かっていたらどうしよう?と思っていたが、案の定ロックの魔法が掛けられていた。

だが、彼女は顔色一つ変えずにアンロックを掛けて、教室の扉を開けてしまった。

ここを指定したのは俺なのだが、いいのか?

学院内で自分の部屋以外にアンロック使うのは校則違反だべ。

彼女は口元に人差し指を当て「黙っててね」のポーズ。

後でギトー先生にこっそりチクるか。

教室の中は明かりが無く、真っ暗だった。

まあ、秘密の話をするのには逆に好都合ではあるけどね。

中へ入るなり、彼女は早速俺に問い質してくる。

「……………では、ミスタ・グランドプレ。あなたの見たものというのを教えて下さい」

口調は実に丁寧だが、その実結構ドスがきいている。

さあ、ここからが正念場だぞ。

「……………実はですね、見てしまったんですよ」

「勿体ぶらなくていいです。何を見たかだけ教えて下さい」

や、やっぱり怖い……。

というか、そんな物言いだと自ら怪しい者だと言ってるようなものじゃないか？

こういうのを語るに落ちるって言うのか？

……まあ、いい。

なら言おう。

俺が見たもの、それは！

「……貴女とオスマン学院長は付き合ってるんですよね？」

「……はい？」

「私は見てしまったのです。貴女がオスマン学院長とイチヤイチャしているところを。その……お尻とか触らせて」

「んなわけあるか！！……ゴホゴホ」

流石のフーケさんも俺のこの発言には素が出ちゃいましたか。慌てて誤魔化すところが何か高橋留美子の漫画みたいだ。

「……私とオールド・オスマンにそのような関係はありませんよ」

「嘘です！私は見たのです！それも一度や二度ではありません！」

「……ここだけの話ですが」

彼女は声を潜めた。

そついや、秘密の話をするならサイレントの魔法を使えば良かったんじゃないかと今気が付く。

サイレントくらいならば俺も使うことが出来るし、彼女も使える筈だ。

まあ、ここに入った時に彼女もそれを提案しなかった辺り、内心自分の正体を知られているかも知れないという動揺があったのかも知れない。

「オールド・オスマンはあなたの見たような嫌がらせを毎日のようにしてくるのです。本当にムカつく!!」

最後の方でまた素が出ちゃいましたね。

きつと自分の正体について知られていたわけじゃないと安心して、少し緩んじやつたんだな。

しょうがないね。

「そうだったのですか……それは良かった」

「良くない!……何かあのジジイにされたことを思い出したら腹が立ってきた! いい機会だからあんたに愚痴らさせて貰つよ! あのジジイと来たら……」

思わぬ展開。

素丸出しのマチルダさんがオスマンのセクハラに対する不平不満を俺に延々と愚痴る。

10分……。

20分……。

30分……。

どんだけ溜まっていたんだ!?

あの糞ジジイ、本当にろくなことしてねーんだな。

そっぴや、あのアホ姫のスカートの中も覗こうとしていたっけか。殺されても文句言えないな、あのボケ老人は。

『タダオ、彼らは皆帰って行ったぞ』

再びローからの念話が入って来る。

おお、ルイズたちがあの場から去って行ったのならば、正にミッシェンコンプリートって奴じゃないか。

さーて、じゃあそろそろ俺もこの場を……。

「それで、あのジジイは小汚いネズミ使って今度は私のスカートの中を……」

……。

彼女のこの愚痴は何時終わるんだろう?

こうして、懇々と彼女の愚痴を聞かされた俺が解放されたのは、それから数時間後のことであった。

彼女は去り際に。

「今言ったことはすぐに忘れてくださいね。さもなければ……」

と、俺に脅しをかけてから帰って行った。

ふー、生きた心地がしなかったぜ。

そんなこんなで、その日はとうとうフーケの盗みは行われなかった。

翌日、宝物庫につけられたヒビが問題になるも、すぐに修復。その様子を少し悔しそうな顔で見っていた彼女が印象的でした。そして翌日、翌々日も盗みは起きず。

結果、フーケ討伐イベントは消滅の憂き目を見た……のカナ？

まあ、良かった良かったと俺はローをふかふかしながら思っているのであった。

ワールドが好きな奴っているのけ？

俺の機転でフーケ討伐がお流れとなってから暫く経った後、使い魔の品評会が行われることとなった。

ほほう、もうそんな時期か。

ってことはもうそろそろアルビオン編に入るんだな。

アホ姫が夜中にこっそり忍び込んで、ルイズとの友情を利用して、戦地へ行かせるという無慈悲なことをするんだな。

アレも最初はゲルマニアとの婚約の障害を排除する云々と言っておきながら、実際は愛しのウェールズ様（笑）へ亡命を勧めるのが真の目的だったろうからな。

アホというか、世が世ならコワイ女やで、あの姫さんは。

まあ、本人がそれにほぼ無自覚なのは親友であるルイズに通じる部分ではあるが。

……なるほど、似た者同士って結局集まるものだから辻褄は合うわな。

ルイズと才人の関係は傍目から見ると、出会った頃と変わっていない。

というか、寧ろ悪化しているようにさえ見える。

この間なんか、ただでさえろくなもの食わさせてもらっていない才人の食事が更にランクダウンしてたからな。

まあ、才人はどうせ隠れてそんなに美味いわけでもないマルトーの残飯漁ってるだろうから飢え死にすることあ無いだろうが、それにしても扱いは悪くなる一方だ。

ルイズが才人に退かれていくようなイベントは悉く潰してきた効果がこうして如実に現れてきている。

積み重ねって大事ね。

あの夜、才人を巡ってキュルケ相手にムキになったのだって、キュルケ憎し以外の感情はほぼ無かっただろうな。

才人に関してはルーンの感情操作で多少はルイズへの好意を植え付けられているだろうから、これだけの仕打ちを受けてもなお、完全にルイズを見限る気配は無い。

寧ろ、機を見ては仲直りして、あわよくば……って感じではある。

そっぴや、こいつ召喚したばかりの頃にレイプ紛いのことルイズにしでかしたしな。

ルーンの洗脳効果恐るべし、だね。

俺ならあんな仕打ちされたら耐えられんよ。

でもまあ、才人のあの好意が愛にまで達さないだろうなというのが何となく分かる。

何というか、才人がルイズを見る目はエロゲのヒロインを見るような目なんだよね。

性処理目的の好意というか何というか。

恋する目では無い。

どうしてそれが俺に分かるのかって？

こちらにはギーシュという恋多き友人がいるんだぜ？

ギーシュはモンモランシーとの仲を取り持ってやって以来、従来の浮気癖はなりを潜め、ところ構わず二人でイチヤイチヤイチヤ……ヴェルダンデが嫉妬の眼差しで見つめるくらいに甘々なのである。

そのギーシュがモンモランシーへ向ける目と才人がルイズへ向ける目は明らかに種類も深度も違うんだよね。

この才人だったら、恐らくワールドと対峙した際にルイズのことで胸がドキドキしないだろうな。

同情以上の感情は抱かないだろうさ。

ま、しめしめといったところ。

今回のアルビオン遠征に対しては俺は特に介入する予定は無い。

何の手柄も立てていないルイズにアホ姫が手紙の件を相談しに行く
確証がないし、仮にそのイベントが起きてルイズたちがアルビオン
へ行くことになったとしても、俺がそれに付いて行く道理はない。
誰しも戦争でも無いのに戦地に自ら赴いて、我が身を危険に晒すよ
うな真似はしたくないわけで。

わざわざ俺が出向いて、連中を邪魔するなんてデメリットの方が大
きいからね。

強いて言うならば、ギーシュのアホ姫尾行を阻止したろっかなって
ところか。

これくらいは簡単に出来るだろう。

ギーシュがいないとこの遠征、いくつか不都合な面もあるのだが…

…。

まあ、別にギーシュがなくても原作の修正力で何とかなるんじゃない
かね？

どうせ、キュルケもタバサもルイズたちを追っ掛けるだろうしさ。
城からの脱出だってシルフィードが何とかしてくれるだろうよ。

フーケことマチルダさんも捕まっておらず、未だにオスマンのセク
ハラに耐えながら秘書やつてるし、宿屋襲撃の際に敵の援軍で来る
ことも無いだろ。

そっいう意味じゃ連中を助けたことにもなるんかね？

まあ、いいか。

そもそもワールドが彼女をスカウトしに行ったのも捕まった後だし、
恐らくそれ以前にはフーケの正体に気付いていなかったらうからね。
彼女が捕まっていない今の状態では、その正体に辿り着くのは困難

だろうさ。

まあ、ワルドは品評会の時に一回学院へは来るんで、その時に彼女へ接触しないか見張るくらいはするけどね。

実戦経験も無く、メイジのクラスもライン程度の俺じゃワルドを見張るのは荷が重すぎるが、俺にはローという素晴らしい使い魔がいる。

本人は謙遜しているが、その実力は俺よりも上だと思っている。だから俺が見張るよりは確実だろう。

そうそう、先日的一件から図らずともマチルダさんとは仲良くなっ
た。

やっぱり、一度腹を割って話をした相手とは繋がりみたいなのが少なからず生まれるんだろうね。

見かけると向こうから声を掛けてくるようになったよ。
前は俺なんかアウトオブ眼中だったし、その頃と比べたら物凄い進歩だよ。

そう言えば、まだ告白の返事を聞いてはいないな……。
彼女が俺みたいなのと付き合うとも思えないけれど、最近の態度を見ていると「脈あるのか？」と思わなくもない。

……まあ、どっちに転んでも俺は別にいいんだけどね。
ただ付き合うことになったら面倒は面倒かな？
だって彼女は土くれのフーケなわけだし……。

レコンキスタ云々に関してはどうしようかねえ？

と、心配してみたところで所詮本筋に殆ど関わらない脇役の俺にとつてこればかりはどうしようもない。

裏から手を回して壊滅に追い込む……なんて、そんな力も後ろ盾も
ございませんからねえ。

仮に出来たとしてそんなことすりゃ、ガリア国王ジョゼフに目を付けられてしまうし。

なので下手すりゃ、もうすぐトリスティンと戦争をおっ始めるわけだが。

まあ、そうなったら迷わずゲルマニアにでも亡命しますわ。

幸い、うちの家族もそんなにこの国に固執していないみたいだしな。私財の蓄えもそれなりにあるから、他国へ逃げてみくらでも再スタート出来ますがな。

まあ、個人的にはワルドが死ぬほど嫌いなので、こいつの邪魔が出来るならしてやりたいがな。

実力的にそれがほぼ不可能なのが残念だ。

精々、こいつが使い魔品評会でこの学院に来た時に、奴のグリフォンに何か仕掛けて、土壇場でドカーン。

みたいなことしか浮かばないわな。

ん、爆弾でも仕掛けてみようかな？

って言っても、んなもんすぐに調達出来ないし、そもそもそんな高性能な爆弾を作る技術など無い。

こういう時、チートオリ主が羨ましく感じるわ。

あーあ、俺もチート欲しいなあ。

『タダオ』

はい、チート来た！

『……チートとは私のことか？……前も言ったが私にあまり期待はするな』

……そうだったね。

『ちなみに私に何をして欲しかったんだ？言うだけ言ってみる』

いやー、ワルドのグリフォンに何か出来ないかなあって思ったんだけどさあ。

『…………まあ何とか出来なくも無いぞ』

そうだね、出来ないよね！

つて、へえっ？

『そのワルドとかいう奴のグリフォンとやらに私の力を送ることで、そのグリフォンを私の支配下に置くことなら出来るぞ』

ちよっ！？

それはかなりチートなのは？

『そう容易いものではないが、タダオの為なら問題はない』

じゃあ、その気になればワルドを高い場所からいきなり落とす、みたいなことも可能だったり？

『そのグリフォンとやらが私の支配下にある時ならば、私が命令すれば出来るだろうな』

ほほう…………。

これは面白いことになりそうだねえ。

ワルドがいつも同じグリフォンに乗っているかはちよつと賭けになるが…………でも、成功すれば一矢報いることが出来るかもつてことか。そういうことなら、もう少し動いて見せますか！

ワールドが好きな奴っているのけ？（後書き）

ローの能力に関しては名前の元ネタに即しております。
気になったら調べてみてね。
わふう〜。

そういやそんなこともありましたねえ(前書き)

今回は短いです

すみません

そついやそんなこともありましたねえ

使い魔品評会の前日。

俺はギトー先生のマンツーマン授業を受ける傍ら、ローに何か凄いことをやらせようかなあと思ったのだが、あまり目立っても良くないので程々にすることにした。
ロー本人はノリノリだったんだけどね。

当日はワルドのグリフォンに仕掛けをしなきゃならんし、更には奴がマチルダさんに接触しないか見張らないといけないから、案外スゲジュールギチギチなのよね。
一分一秒が惜しい。

「ミスタ・グランドプレ。君は相変わらず飲み込みが早いな！流石は私の弟子だ！」

そんな風に思案している俺へギトー先生が眩いばかりの笑顔で話し掛けてくる。
俺を誉めつつ、こっそりと自画自賛。
うーん、奥ゆかしい。

「ギトー先生の教え方が上手いんですよ。そう言えばこの間の……」
俺は謙遜しながら、つい先日のことを思い返す。

それは数日前のこと。
ギトー先生の授業にて、先生が俺らに遍在の魔法を披露しようとしたその時だった。

コルベールという中年ハゲが何も面白くもないカツラを被って教室内へ割り込んで来た為に、授業は中断。

結局そのまま実物の遍在を見ることは叶わなかった。

今までのマンツーマン授業の時にも見せてくれとお願いしたことはあったが、「君にはまだ早いな」と言って、見せてくれなかったのだ。ギター先生が遍在を使うのを俺は楽しみにしていたのだ。

それをあのハゲ中年は……。

あまりにムカついたので、腹いせにコルベールの私設研究所（笑）へ忍び込むと、奴が密かに作っていたエンジンを修理出来なくなるまでぶっ壊してやった。

俺の風メイジとしての力の初披露がこれだよ。

ハハハ。

まあ、そんなこんなで俺は遍在を生で見たことが無いのだ。

「あの時に先生の遍在を見ることが出来なかったのが未だに心残りです」

「ハツハツハツ。ミスタ・グランドブレ。また遍在を披露する機会は訪れる。その機会を待ちたまえ」

「今はダメ……なんですか？」

「うーむ、君が勉強熱心だから、つい色々教えてしまっただけで、大分疲れているのでな。遍在を使うのであれば万全の態勢でなければ……な」

ギター先生はあまり俺に視線を合わせずにそう言った。

恩師にこんなこと言うのもアレだが、言い訳くせえっ！

……でもまあ、遍在ってスクウェアアクリスじゃないと使えない高位

魔法だし、それなりに精神力を使うのには違いないから、ギトー先生の言い分にも一理あるか。
となると、実戦であれだけホイホイ遍在使ってたワルドはやっぱり相当な実力者なんだな。

そんな奴相手にライnkクラスの俺が仕掛けるのはやっぱり荷が重いかなあ……。

まあ、やると決めた以上はやるがね。

「ところで、ミスタ・グランドブレ。最近、ミス・ロングビルと仲が良いようだ？」

ん？

なしてそんなこと聞くんだ？

こういう聞き方は、大抵相手に気がある時のものだが……まさか！？

「……ギトー先生、もしかやミス・ロングビルに気でもおありで？」

「うむ、確かに気にはなっている」

ええー！？

意外な展開！！

「……ム？その顔は何やら勘違いをしていそうだな。誤解の無いように言つと、好意といった意味での言葉では無いぞ」

「へ？では……？」

「……彼女は何やら隠しておるような気がしてな」

「隠している……とは？」

「うむ、ミス・ロングビルには謎が多い。彼女自身はラインクラス
のメイジだと言っていたが、それも嘘ではないかと思っている」

す、するどい！

原作には無かった観察眼じゃないか！

どうしたミスタ・ギトー！？

「……なので、あまり彼女に近寄らない方がいいぞ、ミスタ・グラ
ンドプレ。まあ、取り越し苦労かも知れないがな」

「ご忠告感謝します、ギトー先生」

「では、本日はここまでとしよう。明日は使い魔品評会の日だ。ゆ
つくり休みたまえ。最も、休まなければならぬのは君よりも君の
使い魔かも知れんがな。ハツハツハツ！」

なかなか剛毅なことを言った後、ギトー先生は去っていった。
さて、この後どうするか……。
取り敢えず事前準備として出来ることはあるかな？

そうだ！

マチルダさんの見張りをやりやすくする為に、彼女の品評会当日の
立ち位置を知っておこう。

原作だとこの時点で彼女は学院からいなくなっている。

つまり、原作知識を使えないので、ここは自ら動くしかないのだ。
さて、行くか。

そうして、マチルダさんを探したら、ふとシエスタが何か連れて

行かれる場面に遭遇した。

そういや、アニメだとそんな話があったような……。

何分かなり前の話なんで記憶が薄いナリ。

時期的にもこんな時期だったかも定かではない。

だが、現実として目の前でシエスタが連れて行かれようとしている。
どうする、俺!?

……別にどうもしないわな。

前にも言ったかも知れんが、そもそもシエスタなんぞ俺の好きなキ
ヤラじゃない。

しかも、特別仲も良いわけでは無し、わざわざ助ける義理は無い。

大体、モット伯だっけ?

あのオツサン自体、エロいこと以外は悪いことしてないし、エロい
ことだって悪い訳じゃないだろ。

それだけで悪者扱いなら世の男性の殆どが悪人だわい!

それに、こんなところで延々と下働きするくらいなら、位のそこそこ
高い貴族の慰みものになった方がマシなのとちやいまっか?

ってなわけで俺は何もしない。

まあ、下働きどもと仲の良い才人は助けに行くかも知れんがね。
助ければあ? って感じた。

そんなことより、マチルダさんだマチルダさん。

「あら? どうしたの? こんなところで」

きたきた、きましたよ。

と、振り返ると……。

「あ! ……ミス・ツエルプスター?」

そこにいたのは、マチルダさんじゃなくて、まさかのキュルケだった。

あいつがやって来た！

このタイミングでキュルケ。
ってことは、……どうということだ？

原作を改変したせいでイマイチ流れが掴めん。
時期やタイミングとかがかなり外れて来ているからなあ。
イベントだけはご丁寧にやってくれるみたいだが。

「あら？もしかしてお誘いかしら？」

そんな俺の思案は余所に、キュルケは色ボケた頭で尋ねてきた。
まあ、確かに健全な中高生にとってキュルケは「ゴクリッ……」と
なるような存在だし、実際色々やらしているんだろうが、俺はそこ
まで彼女に興味は無い。

男は皆、ナイスバディに惹かれるみたいなのが、こういう二次元の
世界で一般論と化しているが、俺は断固意を唱えたいね。
まあ、かといってルイズみたいな性格が腐りきったのはゴメンだが。

「ハハハ……冗談はよしてくれよミス・ツエルプストー。自分みた
いの君にアプローチだなんて恐れ多いよ」

「あら？でも、満更でも無さそうじゃないこと？」

何処をどう見たらそう見えるのか……。
仮にそう見えたとしても、それはそう取り繕つとるだけよ。
か、勘違いしないでね！

と、嫌いなツンデレの真似をしてみる。

……俺にはこのツンデレというものの需要がイマイチ分らん。

ぶつちやけ、ただただ不快なだけだ。

所謂、デレた時のギャップ萌えがいいのかも知れんが、それならず
つとデレてくれと思う。

気の強い女を征服するの意味もあるのだろうが、それならデレた
ら意味無いやん！とも思うし。

デレる気配の無い女を屈服させるのがSとしての快感だろう！って
のが俺の持論ですよ。

あ、引かないで。

特に女性陣の方々。

……まあ、女性がこんな糞SS読んでないか。

だから、ツンデレはそういう意味でも中途半端なんだよなあ……。

まあ、好きな人まで否定するつもりは無いけどさ。

話が逸れまくったが、問題はキュルケがここにいる意味だ。

ただの夜の散歩かも知れんが、にしてもこのタイミングで出会うの
は何か意図的なものを感じるなあ。

「ハハハ、からかわないでくれよミス・ツエルプストー。ところで
君はこんなところで何をしているんだい？」

「フフフ……、またルイズをからかってやろうと思ってね」

「君も好きだなあ」

本当にねえ。

キュルケ本人はきつとルイズのことをある程度好いているから、こ
うしてからかったりするんだろうが、当の本人はそんな彼女の本心
はつゆ知らず、ガチで嫌ってそうだしな。

仲良くなるイベントは悉く潰してきたので、まあ仕方ないか。

そうだ。

せつかくだから、今現在、才人のことをどう思っているか、ちょっと聞いてみようかな。

「ところで話は変わるけど、ミス・ツエルプストー。君はミス・ヴァリエールの使い魔についてどう思う？」

「サイト……でしたっけ？そうねえ……。最初はルイズへのからかい目的で誘ったこともあったけど、それだけね。ウブなところは可愛かったけれど、私の微熱が燃え上がるまでには到らなかったわ」

「へー」

ふうむ、そうか。

それがキュルケの本心かどうかは分らんが、現時点で原作程お熱な感じでも無いみたいだな。

何たって才人をダーリンと呼んでいない。

ルイズに対しても、それ程進展している様子は無いみたいだし。俺の努力はちゃんと実になりつつあるわけだ。

うんうん。

いい感じ、いい感じ。

「まあ、あまりからかったら可哀想だよ。ただでさえ劣等生なのに、あまり傷口抉ったら最悪自殺しちゃったりして」

「あら？その時はその時よ。最も、ヴァリエールみたいなプライドの塊がそんなことする筈が無いけれどもね」

あ、ちよつと怒った？
うーん、失言だったな。
下手すりゃ、彼女のルイズへの友情を揺さぶっちゃったかも。
まあ、キュルケがどんなにルイズを思おうが、肝心のルイズがキュルケを毛嫌いしてたら一方通行で終わるんだけどね。
寧ろ、思いの差が大きいほどすれ違いや衝突も大きいから、逆にこれで良いのかも知れん。

ふとキュルケを見ると、彼女が何かを持っていることに気が付いた。
よく見ると、それはデルフリンガー&鞘であった。

ええ！？
何で！？

「み、ミス・ツエルプストー。その剣はどうしたんだい？」

多少、言葉に動揺が。

冷静に考えるとそんな動揺するようなことでも無かった気がするが、まあそれだけ急な展開だったってことだ。

「これかしら？ついこの間、ルイズとちよつとあつて、それで私が預かってたのよ」

「ということは、今からミス・ヴァリエールへ返しに行くのかい？」

「まあね。この剣、インテリジェンスソードみたいで、鞘に入れていないと五月蠅くて五月蠅くて……ミスタ・グランドプレ、これいるかしら？」

「へ？」

我ながら間抜けな返事だが、これは先日手に入れ損ねた俺からすれば、二度と訪れないかも知れないラストチャンス……のような気がするぜ。

「まあ、くれるというなら……」

「アハハ、冗談よ。いくら何でも人のものを他人に渡すような真似はしないわ。例えミス・ヴァリエールが相手でもね」

あら、やっぱりね。

そんな都合のいい展開はやっぱり無かった。

「あら？そんなにガツカリした顔して……そんなにこの錆びた剣が欲しかったのかしら？インテリジェンスソードだけど、ちょっと状態が悪いわよ」

「……いや、いいんだ。君が持っていてくれたまえ」

「……元々私のじゃ無いんだけど」

そんなこんなで会話していたら、結構時間が経ってしまった。当初の目的を危うく忘れかけたが、俺はマチルダさんに会いに行くところだった。

デルフリンガーは惜しいが、キュルケのキャラ的に他人へ他人のものを渡す的な展開は期待出来ないとみていい。ならばさっさと切り上げて後腐れなく別れよう。

「じゃあ、自分はこれでミス・ツェルプスター」

「楽しかったわ。もし、私に気が少しでもあったなら、何時でも部屋に来て下さって結構よ」

「ハハハ、その時はお手柔らかに」

まあ、そんな時は来ないだろうな。

俺には褐色肌属性もナイスバディ属性も無い。

要するにキュルケはタイプじゃない。

ビッチとまで言うつもりは無いが、男漁りの激しい女もそんなに好きじゃない。

古風だが、好きな女性には一途であって欲しいものだ。

キュルケは本気で惚れたらそういうタイプになるのは知ってるのだが、そこまで惚れさせることは俺には出来ないだろう。

そうしてキュルケと別れようとしたその時、俺たちの目の前に新たな来客が現る。

「ハア、ハア、キュルケ！」

お馴染み才人君です。

肩で息をしながら、俺なぞ眼中に無しといった感じでキュルケに話しかけている。

うーん、直接絡むのも嫌だが、かといって無視されるのはあまり気分のいいものではないな。

でも、何でここへ？

……ああ、そういやモット伯にキュルケの家に伝わるとかいう何かを持って来いみたいなこと言われてたなあ。

「あら？ルイズのところの使い魔君じゃない」

キュルケは興味津々といった感じで才人を見ている。

ただ前述の通り、才人をダーリンと呼んでいなかったり、そもそも名前さえも口にしていない時点で彼女の才人への好感度もたかが知れているというもの。

こんなんじゃ才人の頼みも聞いては貰えんだろうね。

キュルケはそもそもこの時点じゃシエスタと絡みはあまり無く、友情的なものも無いし、わざわざ助ける義理は無い。

アニメだと才人への好感度のみで何とかなつた感あるしな。それがこんな感じじゃあまず無理だろ。

「……何で私とそのシエスタとかいう平民のメイドを助ける為に、我が家に代々伝わるアレをあなたに渡さなければならぬのかしら？」

ほらね！

「な、何でだよ！？俺のこと好きだって言ってくれたじゃないか！」

才人は才人でまたなかなか素敵なた詞を吐きますなあ。それ、完全に振られた側の台詞ですよ。

「……何を勘違いしているか分からないけど、あなたに近付いたのはルイズをからかう為。それ以上でもそれ以下でも無いわ」

「そ、そんなあ!？」

うへえ、こいつあキツいねえ。

まあ、才人の熱意にキュルケが折れる可能性が無いわけでもない。ここは紳士として、キュルケを助けてやるとしよう。

「……その平民、見苦しい真似は止めたまえ。ミス・ツエルプストーが困っているじゃないか」

「何だと！？お前に何がわかる！？」

あらら、怒りの矛先がこちらへ向いちゃったよ。

まあ、無理もないか。

ルイズとの仲もあまり進展していない中、シエスタは友人としても異性としても今の才人のよりどころだったろうしな。

だからといって、何でも無茶が通ると思うなかれ。

現実 is 厳しいということを教えてやるう。

「……レビテーション」

「う、うわあー！」

俺は才人を空高く浮かす。

このまま落とせばジ・エンドだが、別に才人を殺したいわけじゃないからな。

このまま、キュルケと引きはがすよ。

「……では、ミス・ツエルプストー。いい夜を」

「バイバイ、ミスタ・グランドプレ。今夜のあなたはなかなか紳士的だったわよ」

「お、下ろせ！下ろせー！ー！」

ああ、もうジタバタすな。

こうしてキュルケから才人を引き離し、適当な場所で下ろす。

才人は俺を睨み付ける。

「てめえ……！」

お？

やるの？

そういや、コイツにはギーシュを罵倒された恨みもあるな。
よし、友人の為に敵を討ってやるとするかな。

才人との対決！その結末は……。

俺と才人は共に睨み合っている。

辺りに人影は無く、誰かの介入も期待出来ない感じだ。

……俺としてはルイズと才人には間接的に嫌がらせはしても、直接手を出さないって決めていたんだけどねえ。

ただ生前から、売られた喧嘩は買う主義でね。

目の前の常識知らずの単細胞には、精々お灸を据えてやらねばならんよな。

これは決闘なんて小綺麗且つ安全なもんじゃあない。

ただの暴力。

それも一方的なものになるだろう。

「……………」

俺は無言で杖を才人へ向ける。

と、才人はすぐに身構えた。

この才人は決闘どころかまともな戦いを経験してはいない筈。

だが、杖を向けただけで反応するくらいには魔法の恐ろしさが分かるみたいだ。

まあ、俺がマチルダさんを引き止めてたあの夜に逆さ吊りにされてルイズとキュルケの魔法の的にされていたんだから、無理もないか。才人は俺が何か仕掛けてくるのではないかと、様子を窺いながら後ずさって距離を取る。

ふーん、確かに距離を取るのは戦いについての定石の一つだね。

でも、メイジ相手にそんな下手な位置取りしても意味はないよ。

多少距離離れていたって魔法使ったら関係ないわけだしね。

だが、ここで俺は意外な行動に打って出た。

「なっ!？」

俺の取った行動に才人が目を丸くする。

と、次の瞬間、俺の膝が才人の顔面へとめり込んだ。クリスピーな音が俺の膝を通して聞こえてくる。

「があっ……!!」

才人は鼻血を噴き上げながら仰け反った。

その顔は信じられないといった表情をしている。

ふふ、そりゃあ驚くわなあ。

杖を向け、如何にもこれから魔法を使うぞ! って感じだった奴が急に距離詰めて飛び膝蹴りとか、想像だにしなかつたろう。

メイジに対する先入観。

魔法は使うが、それ以外はダメ。

肉弾戦になったら自分に分がある。

……その都合のいい願望でしかない思い込みが、奴の防御を僅かに遅らせた。

才人は思わず地面にへたり込み、止めどなく流れる鼻血を手で抑えている。

完全に鼻の骨が折れてるね。

まあ、気持ちのいいくらい見事に決まったからな。

才人は先程までの強気が嘘のように涙目で俺を見上げている。

「だ、だんで!？」

何で？とでも言いたかったのだろうか。

鼻を抑えているので、ちゃんと喋ることが出来ていない。

俺は乱れた制服を正すと、ただ一言こう言っただけだ。

「お前が弱くて、俺が強い。それだけだよ」

俺は確かに生前はオタクだったが、別にアニメや漫画ばかり見ていたわけじゃない。

実はかなりの格闘技マニアだったりする。

ボクシングなどは勿論、修斗やUFC。

果てはOUTSIDERSまでもチェックしているくらいだ。

ジムに通い、筋トレなんかは結構やっていた口である。

流石に実戦までは経験していないが、それでも反復練習で身に付いた動きは転生しても忘れなかった。

今でも、魔法の練習と並行してイメトレやシャドウは欠かしていない。

寧ろ、魔法の練習でより腕の筋肉が発達したと言ってもいいくらいだ。

まあ、俺は筋肉が付きにくい体だから、見た目はゴツく無いんだけどね。

ただ脱いだら細マッチョなのさ！

さて、今目の前で戦意を失いつつある才人をどうしたものか。

ご自慢のガンダールヴの力も実戦で試したことは無いだろうが、発動されれば厄介だ。

幸い、周りに武器の類は無いのだが、万が一もある。

取り敢えず、完全に心を折ってやるとしようか。

「……………」

「……………」

目の前まで近付いてきた俺をまるで狩られる直前のウサギのような目で見つめる才人。

へたり込みながらも必死に後ずさるが、俺はゆっくりと距離を詰める。

そして、足を高く上げた。

「痛いぞ……………」

「へ？」

一瞬の間の後、俺は高く上げた足をそのまま才人の股間目掛けて振り下ろす。

にちゃっ……………。

足の裏に伝わる肉の感触。

靴を履いていても、それが潰れたことが分かる。

再び一瞬の静寂。

神に許された覚悟の時間。

そして……………。

「ギィニヤアアアア……………!!」

まるで藤子不二雄Aの漫画に出て来るような悲鳴を上げて才人はその辺を転がり回った。

白目を向き、涎はだらだら。

どくどく流れる鼻血も構わず股間を抑える。

やがて産まれたての小鹿のようにプルプルと震えると、そのままバ

タンと気を失った。

あまりの痛みに脳が意識をシャットダウンしたみたいね。

俺が才人にやったこと。

それは踏みつけ。

自身の体重の殆どを足に乗せ、そのまま下ろすだけの単純な技。

だが、その破壊力は絶大だ。

何たって自重がストレートに伝わる攻撃だからな。

プロのボクサーだって、全体重を自身の腕に乗せて殴ることはなかなか出来ない。

それが簡単に出来るということが、この技の恐ろしさでもあるのだ。例えば子供であっても、思い切り相手の顔面を踏みつけたら、相手が仮に屈強な大男だったとしても一撃で失神させることが出来るのは刃牙とかでも語られた通りだ。

俺はそれを才人の大事なところによってやったのさ。

無論、全体重をかけ、本気でやったわけじゃあない。

つか、そんなことしたらいくら何でも死んでまうし。

かなり手加減したが、それであの破壊力だ。

急所であることを含めても効果は絶大だろう。

肉体的ダメージは元より、精神的ダメージは計り知れない。

次、目が覚めた時、才人は俺に絶対の恐怖を抱くだろうな。

あそこ潰されて、それでも相手に立ち向かえるようなことなんか、伝説の勇者様でも無理だろうよ。

でもまあ、同じ男としてあそこを潰したのは流石にやり過ぎかな？
って思ってしまった。

多分、潰れたのは片方だけだから生殖活動への影響はそれ程でもないとは思うんだが……。

ああ、でも確か本部流柔術の花田さんは片キンの方が精力が増大す

るって言ってたし、寧ろ結果オーライ？
まあ、最悪水の秘術で治せるだろうと考え、俺は気絶した才人を残してその場を後にした。

その後、学院長室近くの廊下でようやくマチルダさんを見かける。
こんな遅くまで、学院長付きの秘書は大変ねえ。

それでも、こういう事務的な仕事まで完璧にこなせるマチルダさんはやっぱり素敵。

本当にあのボケジジイには勿体無い存在だよなあ。

「ミス・ロングビル。こんなところでお会い出来るとは！」

「あら……。何か用かしら、ミスタ・グランドプレ？」

偶然を装って……という感じには流石に無理があるかな？

学生などあまり来ない仕事場の前での鉢合わせ。

……下手すりゃストーリーカーみたいなことしてるもんなあ。

彼女からの好感度が低かったら、まず間違い無く不審がられるね。

まあ、以前行つた愛の告白が効いているのか、そういう感じは抱かれていないみたいだが、それでも少し面倒臭そうな顔していますな。

「……いえ、明日の使い魔品評会に貴女は何処にいるのか些か気になるまして」

「何故そんなことを聞くのですか？」

「気になる異性にいい所を見せたいという、恋する男の見栄という奴ですよ」

くはあ……。

またも、齒の浮くような台詞。

どうも知らず知らず友人に影響を受けているみたいだ。

「あらあら……。そうですね……。当日はオールド・オスマンと共にいると思いますわ」

「と言うと、学院長室ですか？」

「いえ、当日は特別に席を設けるそうなので……。品評会の後はオールド・オスマンと共に品評会の後処理をする予定となっておりますね」
ほほう。

これで、当日のマチルダさんのスケジュールは大体把握出来た。
基本的にはあのポケジジイが一緒なので、如何にワルドと言えども易々と近寄ってマチルダさんの正体に言及して脅すような真似は出来まい。

まあ、一応遠巻きに見てはおくけどね。
故人曰く、備えあれば憂いなしってね。

そんなこんなで品評会前日は終わり、当日を迎える。
ちなみに才人はあの後、ルイズに見つかり部屋へ連れ戻されたそう
な。

鼻血だらだらで股間抑えながら失神してる才人を見て、ルイズさんはどう思ったのかねえ……。

ローに偵察させたら、どうも才人を強行出場させるらしい。
人間で平民の使い魔を晒すくらいなら辞退を選びそうなルイズにしては思い切った判断だな。

例えば、平民でも親友に使い魔を御披露したい気持ちの方が勝つたのだろうか。

その割に満身創痍の才人を治療する様子は無い辺り性格の悪さが滲み出てますなあ。

鼻を骨折し、片キン潰された状態で明日の品評会に出なきゃならんとは、才人は何とも哀れなり。

まあ、やったのは俺なんだが。

そうそう、シエスタは結局モット伯の元で色んな意味で可愛がられてるらしいよ。

風の噂で聞いたけど、給金も学院にいた時より貰ってるらしいし、良かったんじゃない？

ハッピーエンドだろ。

まあ、彼女の処女の行方は知らんけどね。

そんなわけで使い魔品評会の日がやって来たのであった。

マチルダさんを救え！……何の為に？

さて、品評会当日と相成りました。

まず、アンリエッタを初めとした王宮勢が学院へ訪れる。

無論、あの小憎たらしいワルドもいますね。

そんなにすました顔しているのも今の内だぜ！

なんて書くと、失敗フラグになりかねないのでお口チャックマン。

ワルドは立派なグリフォンに乗って、アホ姫を警護している。

まあ、まだ優秀で姫様からの信頼も厚いグリフォン隊長（笑）だから、こうしてその体を守っているんだろぅがね。

だが、お前の企みはまるっと全部お見通しだ！と某女奇術師の真似をしてみる。

いや、まあ原作知ってるからね。

……しかし、その原作知識もそろそろ限界だ。

元々、二次作品やアニメと設定やらストーリーやらがごっちゃになっていったのだ。

ハッキリ言ってアルビオン編以降はそんなに覚えていない！

断片的にはアレがあったなー、アレもあるなーって思い出せるけれども、それさえ原作の公式な奴なのか二次の創作なのか、断定出来ませぬ。

とは言え、多少なら判別することも不可能では無いけれどもね。

ただでさえ、原作ルートを外れてきているのに、これは心許ないが、後はなるようになって感じた。

ああ、何となく連続転生記録が途絶えそうな予感。

まあ、そんなメタ的な話は後にして、まずは品評会ですよ。

当然、俺とローも出場するので控え室へ。

中に入ると、ルイズと才人を発見。

才人は俺の顔を見るなりさっと顔を青ざめさせて、股間を抑えた。しかし、苦痛に顔を歪ませているのを見ると、やっぱり治療は行われていないみたいだ。

ルイズの才人への想いが物レベルの今だと、わざわざ水の秘術を使うまでも無いって感じが。

多分、放って置いたら、まだ無事なもう片方も壊死しちゃうんじゃない？

ハルケギニアって未知の細菌とかいそうだし、少なくとも消毒くらいはしてあげなきゃ。

才人がスカロンみたいになるのも時間の問題……か。

才人は片キンを失ったせいで大分バランス感覚を失っているように見える。

恐らく、昨晚キュルケから返されたのであろうデルフリンガーを杖によるよると俺から遠ざかっていく。

うーん、あの様子だとアルビオンへ遠征しても、ワールドに勝つどころか、最初のワールドに雇われた山賊相手に殺されるんじゃない？

それ以前に、あの状態で馬に乗ったら、僅か数歩でノックダウンしそうだ。

同じ男としては想像さえしたくないな。

そんなこんなで品評会はスタートした。

俺は機を見てはローに会場の外へ出て貰い、使い魔の目を通してワールドを監視したが、依然マチルダさんへ接触する気配は無く無表情で品評会を見ている。

まあ、アホ姫の護衛をしなきゃならんから、そうそう持ち場を離れることは無いか。

だが、奴には遍在がある。
趣味の悪い仮面を付けて接触する可能性もあるので、マチルダさんも注意して見ておかんな。

そんなこんなで使い魔品評会はスタートした。

……正直、見せ物としては金を取れないレベルだわね。

学生に多くを期待するのは酷かも知れんが、それにしてもまあ酷い。どう見ても、一夜漬けとしか思えないくらいちやっちい芸。

中には、歩く飛ぶといった基本動作を芸と言い張る奴もいる。

水族館のペンギンだって、もっとまともなものを見せると思っぞ。

キュルケのフレイムくらいからようやく見られるものが出て来たって感じた。

ただ、タバサのシルフィードは別に凄くは無いな。

確か、原作だと優勝はコイツだったと記憶しているが、これならまだキュルケのフレイムの方が芸と言える。

完全に見た目だけでの優勝やん！

「続いては、マリコルヌ・ド・グランドプレとその使い魔ローです」

お？

次は俺か。

当初考えていたのは、火の輪を華麗にくぐり抜ける的なことだったのだが、あまり優勝に絡むような派手な芸をやって目立ってもことなので、腹話術をすることにした。

って、これ使い魔の芸じゃなくて、俺の芸じゃねえか！！
しかも、腹話術なんざ出来ないがな！！

……いやあ、強烈なブリザードをこの身に受けたよ。

他の皆、さつきは馬鹿にしてゴメンよ！
俺は君達以下だったよ（泣）。

『……やはり、火の輪をくぐるべきだったのでは無いか？』

いやいや、これでいい。

これでいいんだよローさん。

目立ってもいいことは無い。

誰に目を付けられるか分からんからね。

『そうか。ああ、先程監視のついでにワールドとかいう奴の乗ってる
獣を既に私の支配下に置いてきた。褒めろ、タダオ』

後藤ちゃんナイス！

……じゃなくて、ローさんナイス！

使い魔の目を借りるとは言え、俺も常々監視してられるわけじゃないしな。

俺の目が離れた僅かな時間さえ無駄にしないローは本当に良く出来た使い魔ですなあ。

御礼にふかふかしてやろう。

取り敢えず、目的の一つは達成出来た。

後はマチルダさんを見張って何も起きなければ大成功だ！

……何て高をくくっていたら、まさかまさかの事態ですよ。

それは、マチルダさんがちょっと一人きりになった時だった。

俺はローの目を通して、こっそり監視していたんだが、マチルダさんの目の前についに現れちゃいましたよ。

仮面を付けたワールドが！

ええっ！？

何でっ！？

ワールドはどうやってマチルダさんの正体に辿り着いたワケ？
分からない。

分からないが、現実として二人が邂逅してしまったわけで。

マチルダさんは訝しげな顔で尋ねる。

「……どちら様でしょうか？」

学院長付きの秘書という体を保ちつつも、いつでも杖は抜けるように構えている。

流石はプロだ。

だが、相手もかなりのプロフェッショナルである。

「……土くれのフーケだな？」

「……！」

アカン！

このままだと、マチルダさん勧誘されてしまう！

せっかく、お縄につかずに済んだのに……。

このままだとワールドに使われるだけ使われてしまう！

ど、どうしよう？

……こうなれば仕方あるまい。

ワールドを殺すしかない！

うーん、我ながら何と短絡的な……。

だが、それ以外に策が浮かばない。

今、マチルダさんの目の前にいるワルドは十中八九遍在だろう。

本物は別の場所にいる筈だ。

そいつを殺せば……！！

……そこまで考えてふと気付く。

本物は何処？

それに、仮に本物を見つけ出したところで俺の実力じゃあワルドを殺すのは不可能だ。

急に地割れが起きて奴が飲み込まれるか、空から隕石が墮ちてきて奴に直撃するか……そのくらいの奇跡が起きないと無理だ。

ば、万事休すか……。

『ワルドとかいう奴なら、今一人で獣の手入れをしているぞ、タダオ』

後藤ちゃん、またまたナイス！！

『……先程はスルーしたが、その後藤ちゃんって何だ？』

1億円貯めた人の真似だ、気にするな！

ワルドは今、グリフォンと一緒に……。

一人ってことは周りに誰もいないのか？

『……うむ、いないな』

ふうむ、これが奴を殺る最大のチャンスかも知れん。

手懐けた筈の愛馬……ならぬ愛グリフォンがいきなり襲いかかってきたら、いかなワルドでも易々と対処出来まい。

グリフォンはかなり大型の生物だ。

本気で襲ったら、大怪我どころか命にさえ関わるだろう。
ペットに殺される飼主ってのは決して珍しい話じゃあない。

よし、ロー！

グリフォンを操ってワルドを殺すんだ！

『分かった』

気持ちのいいくらいあっさりとした返事。

うーん、ローは正に使い魔の鑑だね。

逆に俺は御主人様としての力不足をひしひしと感じるよ。

……精進せねばな。

俺は何となくローの目を借りてみた。

すると、目の前に頭から血に塗れ倒れているワルドが映った。

これは恐らく、ローがグリフォンの目を借りて、それを俺が更に借りているからだろう。

何となくこういうことが出来そうな気がしていた。

何となくな。

「ぐうう……い、一体何故……？」

ワルドは虫の息でそう呟いた。

恐らく、油断していたところをグリフォンのクチバシが何かで思い切りやられたのだろう。

ひよっとしたら、異変に気付いて避けられるかも知れんと思っていたが、それは杞憂に終わったみたいだ。

改めてローの力は凄いと思っただよ。

グリフォンはやはり相当な化け物で腕力も凄まじい。

ワルドの頭部は脳みそごと抉られている。

うへえ、直視したくはないね。
だが、水の秘術を甘く見ちゃいけない。
この程度の傷なら回復される可能性がある。
それにもたもたしていると誰かが駆けつけてくるかも知れん。

ロー！ワルドに止めだ！！

『うむ！』

ローの可愛い返事と共にグリフォンは高々と足を上げ、それをワルド目掛けて振り下ろした。

これは俺が才人にやってやった踏みつけと同じである。

才人の時と違うのは、手加減していないのと体重。

グリフォンは恐らく100kg以上は確実にあるだろう。

それがワルドに直接乗っかかるのだ。

その破壊力は常人どころか化け物でも耐えられまい。

一度だけでは無く、二度三度……何度でも踏みつける。

辺りが血の海になってきたところで、ワルドの部下らしき男がこの場へ駆けつける。

「た、隊長……！！」

これくらいでいいだろう………というか、これはもう確実に死んだだろう。

ロー、視点をマチルダさんへ戻せ。

『うむ！』

すぐに視点が戻る。

俺はすぐにマチルダさんを見た。

すると、マチルダさんの目の前にいた筈の仮面の男は何時の間にか消えていた。

マチルダさんは困惑しているようで、出した杖を何も無い空間へ向けながら「えっ？えっ？」と口に出していた。

……ふう、どうやらマチルダさんを救えたようだ。

今思うと、何でこんなことしてんだろうか。

極力本筋に関わらんといいながら、本筋に自ら関わっているがな。

……まあ、いいか。

全部が全部、俺が望んだ行動ってわけじゃないけど、自分でも驚くほど後悔はしていない。

……せつかく転生したんだから、好きなように生きていいよな！
帰るぞ、ロー！

『うむー！』

その後、ワルドの死は事故として発表された。

ワルドを殺したグリフォンの処分が決定されたと聞いた時は少々申し訳無い気持ちになったが、これでワルドのレベルの低い野望は潰えた。

それはとても良いことだと俺は枕を高くして寝ようと思ったが、その前にやることがある。

そう、アホ姫の訪問イベントだ。

マチルダさんを救え！……何の為に？（後書き）

今回はちょっと都合主義な展開だったかも……。

猛省！

作者猛省！！

アホ姫はやっぱりアホだった

品評会の夜。

あのアホ姫がルイズの元を訪れて以下略のイベントが起きる時間である。

とは言え、ワルドの死というイレギュラーがあったので、そのイベントが予定通り行われるかは半信半疑つてところだ。

ワルドは一応はグリフォン隊の隊長であり、王宮の中でもそれなりの人物である。

そんな人間が死んだ日に仮にも国のトップであるアンリエッタ王女殿が、そんな空気の読めないことをするだろうか？

流石に奴の死を憐び、今日くらいは大人しくするんじゃないだろうか？

かくして、やっぱりアホ姫はアホ姫だった。

念の為にルイズの部屋の近くをローに見張らせていたら、怪しげなローブを被って颯爽と現れました。

……どうやらこの国の人間に常識というものを求めてはいけならしい。

そのことを改めて実感させて頂きましたよ。

ワルドの命なぞ、その程度だったってことだ。

俺はワルドは嫌いだ、流石に奴に同情を禁じ得ない。

奴は仕えるべき国と主君を間違えた。

……ああ、今奴が本当に仕えているのはオリバー何ちゃらとかいうペテン師だっけ？

まあ、んなことはどうだっていいんだよ。

今はアホ姫ですよ。

「どうしたんだいマリコルヌ？そんな渋い顔をして？」

そう話し掛けて来たのはギーシュである。

俺とギーシュは今、俺の部屋にいる。

そう、既にギーシュがアホ姫を尾行するというイベントはこうして阻止している。

恋について相談があると言ったら、あっさりに乗ってくれた。

その後、なるべく女子寮に近付かないようにして俺の部屋まで連れて来たのだ。

万が一、アホ姫の姿を見られたら尾行しちゃうかも知れないしね。

女子寮へはローを寄越してアホ姫が来るか、来たらその動向を探らせる。

つてな感じでやっていたのさ。

しかし、仮にもルイズの婚約者が死んでるのに、その夜にこんな鞭打つようなことするかね？

まあ、部屋に入っただけで、中で何やってるかは俺には知る由も無いからな。

ローは既に撤退させたしね。

俺の目的は連中のアルピオン行きを止めることでは無い。

戦地へ赴くなら勝手にすればいいからな。

ただ行くなら関係無い奴は巻き込むなって話だ。

心情的にはキュルケとタバサにもこんな自殺行為に付き合わせるの
は止めさせたいが、残念ながらそこまで仲が良くは無いです。

致し方ないが、彼女たちは彼女たちの好きにさせるとしようか。

「マリコルヌ、恋の相談つてのは何だい？」

おおっと、ギーシュのことをすっかりと忘れていたよ。

まあ、恋の相談はギーシュを呼び出す為の嘘なので、適当に話をで
つちあげるとするか。

「……ギーシュ、年上の女性ってどう思うかい？」

「年上……か。一つ二つならばともかく、それよりももっと上であ
れば難しいと言わざるを得ないね」

「やはりそう思うかい？」

「うん、年が上になるとそれだけ恋は重くなるからね」

「と、言うこと？」

「……仮に一回り年が上の女性と付き合ったとしようか。こちらは
学生気分の軽い恋愛のつもりでも、向こうはそうは思わない可能性
がある」

「ふむふむ……」

「これが恋愛経験豊富な男のあしらい方の上手い女性ならば、まだ
いい。そうでなければ、きっとその恋愛にかける意気込みは並大抵
のものじゃないだろう」

「……」

「下手すれば、別れ話を切り出した途端にグサツとやられるかも知
れないね」

「……うーん。」

最初は本当かよ？って思っていたけれど、何かそうかも知れないと思いはじめてきたぞ。

仮にマチルダさんが相手の場合を想像してみる。

……。

な、何か血塗れの俺が見えてきたぞ。

あまりにしっくり行き過ぎてギーシュの言葉に信憑性がもたらされる。

よし、その気も無いのにマチルダさんに思わせぶりなことを言うのは止めにしよう。

それがお互いの為って奴だろうしな。

「……参考になったよギーシュ」

「いや、何々。ところでマリコルヌの気になる相手はやっぱり……」

「いや、今の言葉で考え直したよ。自分には覚悟が足りなかったみたいだ」

「そうか……。だが、マリコルヌ。一番大事なのは気持ちだ。気持ちさえ強ければ多少の障害は乗り越えられるぞ」

二股かけたお前からそんな台詞が聞けるなんて……。感動で涙が止まらないよ。

「……心に留めておくよ」

俺はそう言うと、この話題を打ち切った。

男同士の恋バナなんて読んで面白くないだろ？

後は下らない話をしてその日は終わった。
念の為、ローに後をつけさせたが、ギーシュはそのまま部屋へと戻ったようだ。

さて、ワルドも死んだし、ギーシュの件も片付いた。
枕を高くして寝るとするか！

今夜はいい夢が見られそうだと。

翌日。

「ん？」

朝食を食べに食堂へ行くと、そこで信じられないものを見た。
キュルケとタバサがいる。

この時間なら、ルイズたちを追っかけているのでは無いか？

周囲を見回しても、ルイズと才人は見当たらないので、奴らがアルビオンへ行っただのは間違い無い筈だ。

では、キュルケとタバサは何故ここにいるのだろうか？

「失礼、ミス・ツエルプストー」

「……あら、ミスタ・グランドプレ。何かしら？」

「その……、今日は何か用事とかあるかい？」

「あら？お誘いかしら？」

「いや、まあ……その……」

「今日は特に何の予定もないから、何時でも来てくれて結構よ。ミスタ・グラントブレなら歓迎するわ」

歓迎されちゃったよ！

……でも、予定無いって言ってたなあ。

つてことは、ルイズたちを追い掛けないってことか？

まあ、確かにルイズとキュルケたちの友情は原作ほど育まれていない。

だが、キュルケは一応はルイズを気にかけていた筈だ。

なのに、ここはスルーしちゃうの？

うーん、でもよく考えたら確かにキュルケがルイズを追いかけたのは、面白半分以上に、彼女が二人を気にしていたのが大きいと思う。大体、そいで無ければあんな早朝にタバサを連れて追い掛けやしないだろうしなあ。

キュルケがわざわざ気にかけるほど二人への興味が無い今ならこうなってもおかしくないかも……。

しかし、こうなるとますますあの二人の生存が心配やなあ……。

確実に死んだんじゃないの？

でも、ワールドは死んでるし、その企みも半ば潰えているから大丈夫か？

少なくとも、ウェールズがワールドに殺されることは絶対に無いわけだし。

邪魔がないからレコンキスタから襲われる前にアルビオン脱出も出来るだろうさ。

なーんだ。

何も問題無いじゃん。

俺は安心して、朝食を食うことにした。

「……この卵焼き、あまり美味くないな」

アホ姫はやっぱりアホだった（後書き）

うーん、短くて済みません。

やっぱりね……。

ルイズたちが学院を出発してから二、三日後、アルビオン終了のお知らせを聞く。

まあ、しょうがないよね。

アルビオンは元々かなり疲弊してたし、レコンキスタとの戦力差も絶望的。

これはなるべくしてなった結末でしょ。

詳細な情報はあまりウチらには伝わらないのだが、どうもウェールズは戦死したそうさ。

原作なら、自分の矜持を全うすることなくワールドに殺されたウェールズなのだから、戦争で死ねたなら正に本望だろ。

ルイズと才人は結局、学院へ帰って来なかった。

一応、行方不明扱いになっているが、十中八九死んでいるだろうなあ。

楽観的に大丈夫だろうと言ってはみたが、冷静に考えれば、ギーシユもいない、キュルケもいない、タバサもいない。

そんな孤立無援な状態で実戦経験ゼロで片キンが潰れたままの才人と心身ともに成長する機会を失い虚無に目覚める可能性すら摘まれたルイズがああ戦地から生還出来るわけがない。

まあ、デルフリンガーというチート武器があるから、もしかしたらその力を使って生き残ったという可能性もゼロじゃあないだろうが、それでも無事というわけにはいかないだろうな。

親友とその使い魔をこんな酷な目に遭わせたアホ姫の心境や如何にってところだ。

知る由もないし、知りたくもないがな。

あの二人がこんな状態になると、流石にキュルケも落ち着きを失っているようだ。

常にピリピリして話しかけるなオーラが漲っている。

「生理かい？」なんて冗談でも言おうものならば、即座に焼き殺されない感じである。

まあ、そんな何一つ面白くない冗談は言わんけどね。

タバサもそんなキュルケのことを気にはしているらしく、無表情でありながらも彼女のことを常に注意深く観察していた。
麗しき友情だね。

キュルケとルイズは何でこう出来なかつたんだろうか？

お家同士に因縁があつたり、俺が悉くフラグを潰したりしたのも大きいのだろうが、それでも仲良くなることは不可能じゃなかつた筈だ。

……やっぱり、ルイズの性格がどん底まで腐りきっていたのが、最大の要因だろうなあ。

仮にキュルケの方から歩み寄っていたとしても、ルイズの性格上それを受け入れることは無かつただろうね。

自業自得という奴か。

原作通り共に生死をかけた戦いを経験しないと、ルイズさんにはキュルケの気持ちは分からんというこっちゃ。

ルイズと才人の行方が分からなくなつて、それ程時間も経っていない内にアルビオンは神聖アルビオンとして、オリバー・クロムウェルをトップに新生した。

このままならば、神聖アルビオンは祝典を機にトリステインへ戦争を仕掛け、この国は滅びを迎えるだろう。

そろそろ、国を出る準備をするかね。

実家の方には既にその旨は伝えてある。

両親はトリステインの人間にしてはやけにあっさりとゲルマニアへ

の亡命を承諾してくれた。

いくら息子に甘いからって、流石に国まで捨てるか？

とは思ったが、説得に時間が掛かって面倒くさくなるよりマシなので、そのまま両親の好意を受けることにした。

まあ、こういう糞SSに有りがちなご都合主義という奴だろう。

俺はご都合主義は大好きなので、作者の好意にも甘えることにする。蓄えていた私財に加え、土地とか色々処分したら、かなりの財産になったみたい。

マリコル又の家がこんなに金持ちだったとは意外だなあ。

ともあれ、これでゲルマニアへ亡命しても、向こうで貴族として再出発することは十分可能なわけだ。

と、いうより既に両親はゲルマニアで爵位貰っちゃったらしい。

はええ！！

でもまあ、戦争への備えは完璧に出来たぞ。

これでいつ戦争が起きても大丈夫だ。

はやく戦争になあれ！

なんてことは言わないが、戦争が起きても大丈夫だ。

そんなこんなで世界情勢は急変していく。

やっぱりね……。 (後書き)

うん、 時間も短い。

そろそろ終わると思います。

大隆起？んなもんどーだっっていんだよ！！

俺は現在、家族と共にゲルマニアにいる。
はい、只今絶賛亡命中ですよ。

学院に休学届けを出したすぐ後くらいに、例の神聖アルビオンの宣戦布告事件……まあ、騙し討ちって奴だが、それが発生してトリステインはしっちゃんかめっちゃんかな状態になっている。

国全体がピリピリムードだしね。

こんな状態じゃあ、亡命するのは厳しかったかも知れんなあ。
つまり、俺はあの時最高のタイミングであの国を脱出出来たわけだ。

神聖アルビオンのトップ、オリバー・クロムウエルはその場で例の手紙を公開し、アホ姫とウエールズのただならぬ関係を告発。

ゲルマニアの上層部はその件でご立腹し、トリステインとの同盟を凍結することを発表した。

まあ、事実上の決裂だろうね。

大事な国の跡取りを王女とは言え尻軽な女に渡すような真似は流石に人の親としても忍びないし。

それにトリステインはそこまでして手に入れなきゃならない国ってわけでも無いからね。

国土の拡大には繋がっても、国の体制そのものがゲルマニアとは水と油だから、いずれ内部でのいざこざに繋がったろうよ。

そうなりゃ、最悪旧アルビオンの二の舞になりかねん。

思いとどまって正解だと思っなあ。

そんなこんなで、此度の戦争にゲルマニアは不干涉を貫くつばい。
賢い判断だな。

トリステインなんて、旧アルビオンに次いで疲弊した国だからな。

同盟を凍結した以上、わざわざゲルマニアが出しゃばる理由が無い。それに滅びゆく国が淘汰されるのは自然の摂理という奴だ。トリスティンには、その長い歴史に幕を閉じて貰いましょう。伝統だけじゃ何も守れなかったね。

いやあ、僅か一、二ヶ月で世界地図が一変しちゃったよ。何で世界が変わるか分からんね。

しかし、ルイズと才人がいないだけでここまで事態が悪化するとはね。

いや、寧ろこの二人に国の命運を託したからこんなことになったと言った方がいいな。

あの二人じゃ、力不足もいいところだったというわけだ。

やっぱり国のトップがアホ姫だったのがいけなかったんだな……。

何でそんな大事なことを実戦経験もろくはない、まともに系統魔法を成功させたことさえないような劣等生に託したのか。

きつと、アホ姫は将棋やチェスといった類のゲームが養弱いに違くない。

神聖アルビオンのトップ、オリバー・クロムウェルもただのペテン師だが、国を預かるものとしての一般常識的なものは一応持ち合わせている。

双方の国のトップを比べただけでも、トリスティンには最初から勝ち目など無かったわけだ。

命運を分けたのが一般常識の差とは……つくづく連中が色んな意味で腐っていることを実感するね。

恐らく、いや確実にトリスティンで一番の常識人且つ優秀なマザリ―二さんはとつと別の国へ行った方がいいと思うよ。

あなたじゃこの国の宰相的ポジションは役不足過ぎる。

ワルドと同じくらい仕えるべき国を間違えた。

いや、まあもしかしたら前王は優秀な人だったのかも知れんが、その優秀さは娘に一切引き継がれなかったのがこの国の最大の不幸だったな。

鳶が鷹を産む、という諺があるが、この場合鷹が鳶どころか蠅を産んじやったに等しいね。

世の中上手くはいかないみたいだ。

そう言えば、ついさっきギーシュから手紙が届いたよ。

どうやら、トリステインへ籍を置く男たちは平民、貴族に関わらず戦争へ参加する旨を通達されたみたいだ。

勿論、ギーシュも戦争へ参加するみたいだ。

まあ、奴の家は軍人の家系だし、最初から拒否権など無いようなもんだな。

手紙には立派に戦つてくると勇ましく書かれていた。

何だかんだでギーシュは友人だし、好きな奴だから死なないで欲しいものだ。

手紙には学院が一旦休校する旨も記載されていた。

女子生徒や留学生を除いた殆どの男子生徒は早速戦闘訓練へ駆り出されたみたいね。

まあ、既にゲルマニアの民となった俺にはそんな義務は無いわけがな。

ギーシュが気を回したのか、マチルダさんの動向も手紙の中に書いてあった。

ったく、余計なことしやがって。

と、ちよつと照れ気味に言ってみる。

どうやらマチルダさんもこれを機に実家へ戻るそうだ。

実家ってことはティファニアの所だろうか？

一応、マチルダさんはトリステインに籍を置いている身な筈だが、

そうなるのと彼女の故郷でティファニアのいる現アルビオンは敵国となる。

無事に帰れるんだろうか？

まあ、あの人はプロだし心配するだけ野暮ってものか。

俺はゲルマニアから密かに応援するよ。

密かにね。

それから、ゲルマニアはこの戦争への介入は一切しないと宣言した。こう宣言された以上は神聖アルビオンもこの国へいきなり仕掛けるような真似はしないだろう。

故にこの戦争は高みの見物ってなわけだ。

いやあ、ギーシュには悪いが亡命して良かったと本気で思うよ。

戦争なんて嫌だしねえ。

俺の両親も、愛する我が子を戦争へ出さずに済んで喜びで泣いていたっけなあ。

これがギーシュみたいに軍人の家系だったら、腑抜けだの何だの言われたかも知れんので、こういう時はマリコル又で良かったと思うわ。

かくして、世界は闘争の時代に入る……ってことだな。

まあ、トリスティンとて仮にも大国の一つ。

旧アルビオンみたいに簡単にやられたりはしないだろうさ。

敗れるにしても、それなりに敵の戦力を消耗させてはくれるだろう。そうなれば戦勝国の神聖アルビオンとて、すぐにゲルマニアへ手を出すような真似はしない筈だ。

風の噂だとゲルマニアはガリア王国と密かに手を結ぼうとしているらしい。

これまた妥当な判断だな。

ロマリアもガリアに並ぶくらいの大国だが、如何せんあそこは上層部が腐り過ぎている。

宗教国家だけに、手を結んだとしても色々と面倒臭いだろうしなあ。

その点、ガリア王国は国力という意味じゃハルケギニア最強と言っても過言じゃない。

寧ろ、事実上最強の国家だ。

必然と手を組むならガリアしか選択肢は無い。

とはいえ、問題は少なくない。

というか、大あり。

……ぶっちゃけ、此度の戦争もガリアの国王ジョゼフの仕業だしなあ。

ジョゼフは色々あつて歪んじゃったんだよね……。

その辺の事情は俺よりこのSS読める人の方が詳しいだろう。

どうしてもその辺の事情を知りたかったら他のSS読んでくれ。

ジョゼフは確かに世界を破壊しようとする危ないオッサンではあるが、王としての力が随一なのも確かなんだよね。

逆に言えば、このオッサンを何とか出来たら、何も問題は無いわけだ。

ふーむ、俺のやることは決まったな。

ジョゼフ真人間計画。

これが俺がゲルマニアで平和に過ごせる為の条件だ。

だが、果たしてそんなこと出来るのか？

俺はただのマリコルヌだぞ？

『タダオ、私はお前を最後まで助けてやるぞ』

そう、力強く俺の頭の中で宣言してくれたのは可愛い可愛い使い魔のローだ。

ローがいたら、何でも出来そうな気がする。

何の根拠も無い自信だが、それでいいじゃないか！

風車に挑むドン・キホーテを誰が笑えようか！

ジヨゼフ真人間計画が今始まる！

大隆起？んなもんどーだっていいんだよ！！（後書き）

終章開始です。

大隆起は起きません。
そういつ世界線です。

それでも世界は廻っている

ジョゼフ真人間計画。

一晩経つて、冷静に考えてみたらとんでもなく無謀なことだと改めて思い直す。

そもそも大国の王に、こんな下々の俺がどうやって接点を持つて言うのか？

アホ姫ですら、まともにあいまみえる機会は無かったのに。

……まあ、アホ姫の場合は自ら警護を振り切つて、単身ルイズたちに会いに行つた時に出会う機会があつただけだね。

全然、会いたくないけどさ。

まあ、ジョゼフがそんな常識外れな行動を取るわけがないし、仮に取つたとしても、ジョゼフ自身もかなりのチート能力者。

まず一筋縄でいかないだろうけどね。

はて、どうしたものか。

ローを使うにしても限界はある。

他の生き物を使役する能力は確かに凄いんだが……。ん？待てよ。

生き物を使役するってことはもしかして……。

ロー、お前人間を使役することは出来るのか？

『難しいが、出来なくはない……とだけ答えよう』

出来なくはないってことは出来るってことだよ……。それなら、ジョゼフをローの支配下に置けばいい。

そうすれば、あの破壊衝動……とは少し違うか？

まあ、それに近い何かを完全に封じ込め、世界平和が約束される。

とすれば、ジヨゼフと出会うという最大の難関を何とかしないと
おっしゃ！

これで一つの関門はクリアしたな。

……だが、普通に考えたら、ジヨゼフみたいな一国の王に、一般市民は会うどころか、お目にかかることさえ難しいよなあ。

一国の王たる者、そう易々と外へは出歩かないからね。

第一、今自分がいるのはゲルマニア。

他国である。

余計にジヨゼフとの接点がないわけだ。

うーん、どうしたものか……。

！！

そう言えば、同学年にジヨゼフと接点がありそうなキャラがいたよ！

そう、タバサ！

このSSじゃあ、あまり出番の無かった長門のパクリキャラ！

本流を辿れば綾波レイだったり、更に昔のキャラだったりするんだ
ろうが、時期的には長門だろうな。

まあ、そんなことはどうだっていい。

彼女を通じてジヨゼフに接触するのが、今の俺にとっては唯一無二
の方法だろうな。

ちなみに俺は無口キャラはあまり好きじゃない。

タバサは元々快活で朗らかな年相応の少女だった……みたいなのは
よく見るんだが、だとしたら尚更たちが悪い。

無口キャラを作っているわけだからな。

皆もよく考える……無口でも何でもキャラを装ってる時点で、そい

つは相当痛い女だぞ。

そりゃあ女性という生き物は多かれ少なかれキャラを作るかも知れんが、あそこまでガラツとキャラを変えられると流石に引くわ。多重人格を疑っちゃうよ。

やるなら裏さえも表になるくらい徹底的にやるべきだよな。

まあ、徹底的にやっても嫌いなものは嫌いだけどさ。

それに仮に無口キャラが地だったとしても、それはそれで願い下げである。

会話の続かないような奴と一緒にいて楽しいのは、側だけしか見ていないような奴だ。

それならラブドールと付き合いなさいって話ですよ。

生き物である以上、ある程度意志疎通をはかれないと俺的にはぶっちゃけ厳しい。

しーきびって奴だ。

話が大きく逸れちゃったので軌道修正すると、俺の知り合いの中で一番ジョゼフに近いのはタバサである。

何たって、多少なりとも血が繋がっているわけだからな。

狭くはあるが、唯一ジョゼフへ至る道の門。

それがタバサなのは間違いない。

となると、問題なのはタバサの現在の居場所だ。

学院は休校。

となれば留学生である彼女は国へ戻るしかない。

だが、ご存知の通りタバサは易々と国へ帰れるような立場じゃない。となると、考えられるのは二つ。

1．野宿

2．キユルケの所

1 だとした場合、とてつもなく厄介だ。
何たって居場所の特定が不可能に近い。

2 の場合は1 よりもマシではあるが、やはり少々厳しい。

何故ならキュルケはここゲルマニアでも有数の名家の人間である。
その名家を正式に訪問するのは、学院でキュルケの部屋へお呼ばれ
するのは訳が違うので。

友達の家に遊びに行く程度理由じゃ、やっぱり厳しいだろうなあ。
ただ、もしもキュルケの所にタバサがいるのであれば、居場所の特
定だけは出来る。

これが出来るのと出来ないのでは大きく変わるからね。
取り敢えず、連絡だけでも取ればいいんだが……。

一応、ツエルプストー家に手紙を出しておいた。

内容は『トリステインが戦場になる旨を聞きましたが、貴女は無事
でしょうか?』みたいな感じだ。

多少、誤解されそうだが、まあいたら返事は寄越してくれるだろう。
キュルケはそういうところ義理堅いしね。

それにあわよくばタバサの所在について触れてくれるかも知れない
し。

仮にキュルケのところになくても、もしかしたら何かしら伝えて
ある可能性もある。

タバサはタバサでキュルケのことを慕っていたしね。

何はともあれ返事だ。

返事が来ないことには始まらない。

そして、手紙を出してから数日後に返事は来た。

内容は『心配してくれて有難う』から始まる現状報告と亡命した俺

に対する皮肉であった。

まあ、その後にゲルマニア自慢みたいな文があったから、「冗談の意
味も含まれているんだろうけどね。」

そして、俺の欲しかった情報は……あった！

『タバサも一緒よ』

思わず飛び上がりそうになる。

世界は俺の為に廻っていると勘違いしそうな程だ。

俺は再び筆をとり、手紙を綴る。

『今度、挨拶も含めてそちらへ伺います』

それでも世界は廻っている(後書き)

もう短いまま通します。

手の甲に血をポタポタ垂らして、血の痕が急に増えたら気を付ける！

あれよあれよと言う間に、ジョゼフ王と対面。

いやあ、ここまで来るのに苦労したわあ。

だが、それもこれで終わる。

俺は気を引き締め、ジョゼフとの対面へと臨む！

……え？

何でいきなり対面なんだって？

それまでの過程はどうしたって？

……おかしなこと言うねえ君たち。

あの波乱万丈の旅を忘れたのかい？

……ハ！？

まさか、ディアボロにキングクリムゾンを使われてしまったのではないかな？

そうとしか考えられまい。

決して作者が飽きたとか新作を思い付いたから、とっとと終わらせたいとか、そんなことじゃあ無いからな！

しかし、あの波乱万丈の旅が無かったことになっているとは……。
口惜しい！

そして、恐るべしディアボロのキングクリムゾン！

……流石はディオのザ・ワールドや大統領のD4Cに並ぶ最強スタ
ンドだわ。

個人的にディアボロのキングクリムゾンはジヨジョ史上最も対処の難しいスタンドだと思う。

ぶっちゃけ、誰の助けも得ずにディオのザ・ワールドを見破ったジヨニイ・ジョースターですらキングクリムゾンは初見じゃ見破れないだろうね。

仮に見破れたとしても、ザ・ワールドに全く対処出来なかったジヨニイではキングクリムゾンに何も出来ないだろう。

そう考えると、キングクリムゾンの能力を見破っただけでもポルナレフはどんだけ凄いんだって話になるわけだが。

まあ、ポルポル君はディオとの戦いを経験していたから、そのおかげで。

実際、能力を見破って使われたかどうかを判別する手段までは編み出したが、それ以上は何も出来ずにぶっ殺されたしな。

つくづく5部はジョルノがゴルドエクスペリエンス・レクイエムに目覚めなければ終わっていたんだなと感じさせるよ。

そういう意味じゃブッチ神父や吉良吉影は各部のラスボスの中でもかなり落ちるんだな……。

究極生命体カーズが今まで最強だと思っていたけど、大統領のD4Cがあれば確実に殺せることも分かった以上、あいつも最強の座からは転落したしな。

……そう言えば、ジヨジョリオンの主人公の名前が吉良吉影だったのにはビックリしたなあ……。

荒木先生、吉良吉影好きだって言ってたからなあ……。

まあ、主人公が記憶喪失設定だから吉良吉影が本名とは限らないわけだが……。

荒木先生だけに、きっと今後も我々の予想を覆すような展開を用意してくれてるに違いない。

作者見習いたいねえ。

……と、ジヨジョ話はここまでするとしようか。

君たちがディアボロに攻撃を受けた。
それだけ知ってもらえればここまでの長い前口上はその役目を終える。

ともかくにもジョゼフとの対面はもうすぐだ。

隣にいるタバサも精悍な顔つきでこの緊張感を味わっている。

思えば、この長い旅はタバサがいなかったら何もかもがダメだったろう。

イザベラとかいうヒス女の指令という名の無理難題を二人でこなしていた。

まあ、俺は何かと理由を付けて実際に戦いに参加したりはしなかったんだがね。

だが、その内に、何故かタバサは俺に思いを寄せるようになった。もしかやタバサはだめんずに惹かれるタイプなのか？

絶対幸せになれないタイプだな。

ある夜、俺はタバサに告白を受けた。

あのタバサが自分から思いを打ち明けたのだ。

並大抵の覚悟では無かったのだろう。

……だが、俺は振ってやった！

ククク……初めてやってみたが、告白してきた相手を振ってやるって意外に気持ちがいいもんだな！

ましてや、それが鼻持ちならない奴なら格別ツ！

格別だ！！

その後、気まづくなりながらもイザベラの指令をこなしていき、何やかんやでジョゼフと対面することになった。

これは最大で最後のチャンス。

これを逃したら、きつと今後チャンスは回ってこない！

行くぞ、ロー！

『うむ！』

そして、俺たちはガリア城の中へと入っていった。

手の甲に血をポタポタ垂らして、血の痕が急に増えたら気を付ける！（後書き）

次回、最終回

終わりッ！

「おじいちゃん、今日はいい天気よ……」

「ん……ああ……」

瞼を開けることさえ容易ではなく、体を起こすのが何よりも辛い。だが、日の光はいつ浴びても気持ちがいい。

「……あたたかい」

「フフ……今日は調子良さそうね？」

「ああ、今日は調子いいみたいだ……」

はつきり言って虚勢である。

調子なんて、ここ数日良くななどない。

老衰とは本当に恐ろしいものだ。

だが、家族を心配させるようなことをわざわざ言っほど、俺も無神経ではない。

「……じゃあ、おじいちゃん。眩しくなったら呼んでくださいね？」

「ああ……」

孫娘がそう告げて部屋から出ると、俺はバタツとベッドへ倒れ込んだ。

瞼を閉じ、死んだように眠る。

こんなところを見せてしまうと、また家族に余計な心配をかけてし

まうかも知れないな、と俺は自嘲した。

俺の余命はあと数日……といったところか。

命の灯火が日々削られていくのが自分には驚くように分かる。

日に日に衰えていく体は遂に俺から自由を奪った。

糞をしにいくのも自分一人ではもう出来ない。

老衰というものは本当に恐ろしい。

かつての俺が転生した時に記憶を消した理由も分かる。

こんな結末が来ると分かっていたら、とてもそこまで生きてはいられない。

賢明な判断である。

「……フフ、死ぬのは、やはり怖いな」

俺はそう呟くと、再び若い頃を回想する。

ベッドへ張り付けになった俺の唯一の娯楽である。

記憶に霧がかかって、所々途切れているのが残念だ。

さて、何処まで回想したか……。

ガリアの国王、ジョゼフ洗脳に成功した俺は、ジョゼフを殺そうとするタバサの説得に手を焼いた。

何せ、タバサにとってジョゼフは父親の敵だ。

到底、許せるものではない。

説得は無理と判断した俺はローの力でタバサを洗脳し、ジョゼフへの憎しみを全て封じ込めた。

かくして、ジョゼフ真人間計画は大成功に終わったのだった。

その後はもう平和の二文字だ。

ガリアとゲルマニアは無事同盟を結び、ここにハルケギニア最強の

連合軍が誕生した。

神聖アルビオンもここに太刀打ちは出来ない足踏みしていたら、あっさりとオリバー・クロムウェルのインチキが暴かれ、そのままなし崩しに消滅した。

まあ、奴の糸を引いていたのは何を隠そうジョゼフなのだから、当然の結果と言えば当然の結果である。

ジョゼフは国王としてもやはり優秀で、ヴィダーシャルを通して、エルフたちと国交を持つことに成功した。

ただでさえ強力な国なのに、エルフまでその後ろについたら誰も逆らわなくなる。

ガリアとゲルマニアはこうして世界の支配者となった。

俺はあの後、平穩無事に過ごした。

嫁を貰い、子が生まれ、そして子が孫を連れてきてくれた。

ありきたりだが、得るのは難しい普通の平和を俺は手に入れたのだ。

こうして、今に至る……のだが、残念。

思っていたより自分の命が尽きるのが早かったみたいだ。

『タダオ……』

俺の最愛の使い魔が心配そうにこちらを覗き込む。

だが、仕方ない。

死は誰にも平等に訪れるのだから。

「ロー……こっちへ来い」

俺はローを招くと、最後の力を振り絞って、その体に顔を埋めた。

「……相変わらずお前はふかふかで気持ちがいいな」

『タダオ……』

ああ、幸せだ。

こうして気持ち良く逝けるなら……。

俺の命はあと少しで尽きる。

だが、その前に一言。

これ、マリコルヌである必要なくなっ！？

完

終わりッ！（後書き）

というわけで終わりです。

短い間でしたが、応援有難うございました！

このオチは最初から考えていましたが、そこまでの道筋は大分当初より変わっています。

最後までタイトルから（仮）が取れなかったのが心残りです。

それでは、また何処かで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7007t/>

【転生】マリコルヌとして生きる俺の新たな命（仮）

2011年6月29日10時06分発行